1998年度
講義計画

桃山学院大学

講　義　計　画

ケンブリッジ出版

<９８ＳＷ生対象>

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
社会学基礎講義	２１	通　期	４単位	宮　本　孝　二

［講義概要・学習目標］

1　社会学の歴史と内容の概略を示した上で、現代社会を分析するための基礎概念及び特質について理解させる。
2　社会生活の基本的な場（家族、地域、組織集団）の基本的特性と現代的変化について理解させる。
3　現代社会の変動に伴って生じる多様な社会問題の現状と対策について理解させる。

［成績評価の方法］

後期テストの結果に、出席点、小テスト、レポートなどを加味して総合的に評価する。

［教科書］

倉橋・丸山編『社会学の視点』ミネルヴァ書房

［講義計画］

①社会学の歴史の概要と全体像
②現代社会の分析：社会生活の基本的な場に見られる変動の諸トレンドと、それにかかわる諸要因、諸帰結の因果連関
③変動の基本要因としての科学技術の諸相
④科学技術の社会的・文化的な機能と逆機能
⑤情報科学技術の社会的・文化的な機能と逆機能
⑥高度産業社会における労働、職業および経営
⑦専門職の職業的社会化と組織
⑧家族の構造と形態の諸類型
⑨家族の機能と逆機能（家族問題）
⑩家族の類型と機能をめぐる諸トレンド
⑪家族問題の解決と地域社会の役割
⑫地域社会の構造と形態の諸類型
⑬都市化と都市問題
⑭過疎化と地域開発問題
⑮地域社会を構成する集団・組織と地域問題
⑯アイデンティティ問題
⑰現代社会の不平等と差別
⑱いじめ問題
⑲消費生活と廃棄問題
⑳政治的無関心と暴力
㉑宗教問題
㉒犯罪と非行
㉓グローバルな問題（戦争、飢餓、環境など）

［参考文献］

その都度指示する。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
社会福祉援助技術現場実習Ⅰ	０１	前期集中	２単位	石　田　易　司
	０２	前期集中	２単位	岡　井　哲　明
	０３	前期集中	２単位	坂　本　光　哉
	０４	前期集中	２単位	瀧　澤　仁　唱
	０５	前期集中	２単位	藤　田　　譲
	０６	前期集中	２単位	松　端　克　文
	０７	前期集中	２単位	松　本　眞　一
	０８	前期集中	２単位	安　原　佳　子

［講義概要・学習目標］

1　社会福祉の現場実習を通して社会福祉専門職（社会福祉士）として仕事をするうえで必要な「心構え」、「専門知識」、「専門援助技述」及び「関連知識」の内容の理解を深める。
2　「専門知識」、「専門援助技術」及び「関連知識」を実際に活用し、介護を必要とする老人や障害者等に対する“相談援助業務”に必要となる資質・能力技術を習得する。
3　職業倫理を身につけ、福祉専門職としての自覚にもとづいた態度・行動ができるようにする。
4　具体的な体験や援助活動を、専門的援助技術として概念化し理論化し体系だてていくことができる能力を涵養する。
5　関連分野の専門職との連携のあり方や共同して業務を進行していくうえでの具体的内容・方法を理解する。

［成績評価の方法］

・出席重視
・レポート　　等で総合的評価

［教科書］

授業時指定する。

［講義計画］

1　実習オリエンテーション
2　視聴覚学習
3　社会福祉現場で働く社会福祉士からの講話
4　現場体験学習
5　見学実習
6　見学実習記録に基づくレポートの作成
7　全体総括

［参考文献］

糸賀一雄著『福祉の思想』（ＮＨＫブックス）
小山内美智子著『あなたは私の手になれますか』（中央法規）
社会福祉実践理論学会編『基礎用語辞典』（川島書店）

科　　目　　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
社会福祉原論		通　期	4単位	松　本　眞　一

［講義概要・学習目標］

1　現代社会における社会福祉の理念と意義について理解させる。
2　社会福祉の対象と援助の形態及び方法について、老人や障害者を中心に介護との関係に十分留意させつつ理解させる。
3　社会福祉サービス体系の概要について理解させる。
4　社会福祉の専門性と倫理について理解させる。
5　社会福祉士及び介護福祉士法の意義と内容について理解させる。
6　社会福祉の法体系、実施体制及び財政全体の概要について理解させる。
7　社会福祉をめぐる我が国及び諸外国の動向について理解させる。

［講義計画］

1　現代社会と社会福祉
　1）社会福祉理念の発達
　2）概念と範囲
　3）役割と意義
2　社会福祉対象の把握方法
3　社会福祉援助の具体的な形態と方法
4　社会福祉援助活動における専門性と倫理
　1）専門性と専門職の内容
　2）保健・医療等関連分野の専門職との連携のあり方
　3）社会福祉援助活動と倫理
5　社会福祉士及び介護福祉士法の意義と内容
6　社会福祉関係法制と実施体制及び財政の概要
　1）社会福祉事業法・福祉六法及び関連法規の内容及び相互関係
　2）社会福祉の実施体制
　3）社会福祉の財政と費用負担
7　社会福祉をめぐる我が国及び諸外国の動向

［成績評価の方法］

前期及び後期の試験期間内に定期試験を実施し、その総合点により成績評価を行う。また、出欠による評価も加味される。

［教科書］

松本眞一編　『現代社会福祉論』ミネルヴァ書房

［参考文献］

福祉士養成講座編集委員会（編）
『社会福祉士養成講座　第1巻　社会福祉原論』中央法規出版

科　　目　　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
社会福祉援助技術各論ＩＡ		通　期	4単位	小　西　加保留

［講義概要・学習目標］

1　社会福祉援助技術における直接援助技術の内容と性格・位置づけについて理解させる。
2　個別援助技術（ケースワーク）の理論や技法・技術が老人や障害者等にどのように適用され問題解決へと導くのか、介護と関係づけて事例を通して理解させる。

［講義計画］

1　社会福祉援助技術における直接援助技術の位置づけとその内容・性格について
2　個別援助技術（ケースワーク）の理論と技法・技術
①直接援助技術と個別援助技術
②個別援助技術の意義と特徴
③個別援助技術の歴史
④個別援助技術の構造と構成要素
⑤個別援助技術の機能
⑥個別援助技術の援助関係と原則
⑦個別援助技術の展開過程と技術
・受理面接（インテーク）と社会診断
・社会治療
・終結
⑧個別援助技術の新動向（統合論など）
⑨面接の意義と技法・技術
⑩記録の意義と方法
⑪効果測定の意義と技法・技術
⑫個別援助技術の適用分野とそこにみられる特殊性
⑬スーパービジョンの意義と方法

［成績評価の方法］

レポート提出、出席状況、学年末試験によって評価する。

［教科書］

大塚達雄、井垣章二、沢田健二郎、山辺朗子（編著）
『ソーシャル・ケースワーク論　社会福祉実践の基礎』（ミネルヴァ書房）

［参考文献］

バイスティク（著）『ケースワークの原則』（誠信書房）

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
医学一般		通　期	4単位	郭　麗　月

［講義概要・学習目標］

1　人体の基本的な構造や機能について理解させる。
2　臨床医学の各分野の概要について理解させる。
3　医学的リハビリテーションの概要について理解させる。
4　現代社会の代表的な疾患について理解させる。
5　公衆衛生の概要を理解させる。
6　保健医療対策の概要を理解させる。
7　医事法制と保健・医療機関及び専門職について理解させる。

［成績評価の方法］

レポート、定期試験の成績で評価する。

［教科書］

福祉士養成講座編集委員会編
社会福祉士養成講座１４「医学一般」（中央法規）

［講義計画］

1　人体の構造・機能
2　一般臨床医学（内科、外科、整形外科、神経・精神科等）の概要
3　医学的リハビリテーションの概要
4　現代社会と疾病
　1）がん、成人病
　2）各種感染症
　3）神経・精神疾患
　4）先天性疾患
　5）難病
　6）その他
5　公衆衛生の現状
　1）人口動態
　2）疾病と受療状況
　3）医療関係者
　4）医療施設
6　保健医療対策の現状
7　医事法制と保健・医療機関及び専門職
　1）医療法、医師法、保健婦助産婦看護婦法等、医事法制の概要
　2）保健・医療機関、専門職と福祉専門職の連携のあり方

［参考文献］

適時紹介する。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
老人福祉論		後期集中	4単位	坪　山　孝

［講義概要・学習目標］

1　老人の精神的・身体的特徴や障害について理解させるとともに、老人福祉の社会的背景について理解させる。
2　現代社会における老人福祉の理念と意義について理解させる。
3　老人の福祉ニーズの把握方法について理解させる。
4　老人福祉の法とサービスの体系について理解させる。
5　民間シルバーサービスの社会的意義とその現状について理解させる。
6　老人福祉及び関連分野の専門職及びその連携のあり方について理解させる。
7　老人のための地域及び住環境の整備と福祉機器について理解させる。
8　老人に対する相談援助活動について理解させる。

［成績評価の方法］

学年末試験の成績によって評価する。

［教科書］

浅野　仁、西下彰俊編著　『改訂版　老人福祉論』（川島書店）

［講義計画］

1　高齢社会と老人
　1）老化と老人
　2）家族と老人
　3）社会と老人
2　現代社会と老人福祉
　1）老人福祉理念の発達
　2）概念と範囲
　3）役割と意義
3　老人の福祉ニーズの把握方法とその具体的内容
　1）把握方法
　2）具体的内容
4　老人福祉の法の目的、対象及びサービスの体系とその具体的内容
　1）老人福祉法
　2）老人保健法
　3）その他の関連法規
5　老人に対する福祉サービスの現状
　1）在宅福祉サービス
　2）施設福祉サービス
6　民間シルバーサービスの役割と意義及びその現状
7　老人福祉及び関連分野の組織・専門職及びその連携のあり方
　1）組織・専門職
　2）連携のあり方
8　老人のための地域及び住環境の整備と福祉機器
　1）地域と住環境の整備
　2）福祉機器
9　老人に対する相談援助活動
　1）相談援助活動をすすめるうえでの留意点
　2）具体的事例

［参考文献］

「厚生の指標、国民の福祉の動向」の他に、随時、講義中に紹介する。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
児童福祉論		通　期	4単位	松　本　眞　一

［講義概要・学習目標］

1　現代社会における児童の成長・発達と生活実態について理解させるとともに、児童福祉の社会的背景について理解させる。
2　現代社会における児童福祉の理念と意義について理解させる。
3　児童福祉ニーズの把握方法について理解させる。
4　児童福祉の法とサービスの体系について理解させる。
5　民間サービスの社会的意味とその現状について理解させる。
6　児童福祉及び関連分野の専門職及びその連携のあり方について理解させる。
7　児童のための地域及び住環境整備と福祉機器について理解させる。
8　児童に対する相談援助活動について理解させる。

［成績評価の方法］

前期及び後期の試験期間内に定期試験を実施し、その総合点により成績評価を行う。また、出欠による評価も加味される。

［教科書］

松本眞一著　『児童福祉論』　相川書房（１９９５年刊）

［講義計画］

1　現代社会と児童
　1）人間の成長・発達と児童
　2）家族と児童
　3）社会と児童
2　現代社会と児童福祉
　1）児童福祉理念の発達
　2）概念と範囲
　3）役割と意義
3　児童の福祉ニーズの把握方法とその具体的内容
　1）把握方法
　2）具体的内容
4　児童福祉の法の目的、対象及びサービスの体系とその具体的内容
　1）児童福祉法
　2）母子及び寡婦福祉法
　3）母子保健法
　4）その他関連法規
5　児童に対する福祉サービスの現状
　1）在宅福祉サービス
　2）施設福祉サービス
6　民間サービスの役割と意義及びその現状
7　児童のための地域及び住環境の整備と福祉機器
　1）地域及び住環境の整備
　2）福祉機器
8　児童福祉及び関連分野の組織・専門職及びその連携のあり方
　1）組織・専門職
　2）連携のあり方
9　児童に対する相談援助活動
　1）相談援助活動をすすめるうえでの留意点
　2）具体的事例
10　子どもの権利に関する条約

［参考文献］

福祉士養成講座編集委員会（編）
『社会福祉士養成講座　第４巻　児童福祉論』（中央法規出版）

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
障害者福祉論		通　期	4単位	北　野　誠　一

［講義概要・学習目標］

1　現代社会における障害の理念と障害者の実態を理解させるとともに、障害者福祉の社会的背景について理解させる。
2　現代社会における障害者福祉の理念と意義について理解させる。
3　障害者の福祉ニーズの把握方法について理解させる。
4　障害者福祉の法とサービスの体系について理解させる。
5　民間活動及び民間サービスの意味とその現状について理解させる。
6　障害者福祉及び関連分野の専門職及びその連携のあり方について理解させる。
7　障害者に対する相談援助活動について理解させる。

［成績評価の方法］

レポート及び試験

［教科書］

定藤、北野、佐藤　編著『現代の障害者福祉』（有斐閣）

［講義計画］

1　現代社会と障害及び障害者
　1）障害の概念
　2）家族と障害者
　3）社会と障害者
2　現代社会と障害者福祉
　1）障害者福祉理念の発達
　　①リハビリテーション
　　②ノーマライゼーション
　2）概念と範囲
　3）役割と意義
3　障害者の福祉ニーズの把握方法とその具体的内容
　1）把握方法
　2）具体的内容
4　障害者福祉の法の目的、対象及びサービスの体系とその具体的内容
　1）心身障害者対策基本法とリハビリテーション体系
　2）障害別福祉サービスの体系と内容
　　①障害児対策
　　②身体障害者対策
　　③精神薄弱者対策
　　④精神障害者対策
　3）関連法による施策
　　①保健・医療
　　②教育
　　③雇用・就労
　　④年金、手当及び経済的負担の軽減
　　⑤住宅
　　⑥生活環境
5　民間活動及び民間サービスの役割と意義及びその現状
　1）民間活動
　2）民間サービス
6　障害者福祉及び関連分野の組織・専門職及びその連携のあり方
　1）組織・専門職
　2）連携のあり方
7　障害者に対する相談援助活動
　1）相談援助活動をすすめるうえでの留意点
　2）具体的事例

［参考文献］

定藤、岡本、北野　編著『自立生活の思想と展望』（ミネルヴァ書房）
定藤、中西、北野　編著『障害者の自立生活センター』（朝日新聞厚生文化事業団）
総理府　編『障害者白書』（平成９年版）

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
経営学総論	01	通期	4単位	面地豊

［講義概要・学習目標］

あるものの性格や内容を知る重要な方法として歴史的方法がある。本年度は、経営学という学問の性格や内容を知る方法として歴史的方法を用いる。

日本で経営学と称せられている学問は、アメリカ経営学とドイツ経営学の二大潮流を合わせて総称したものである。講義は、アメリカ経営学とドイツ経営学の歴史的展開を通じて、経営学という学問がどんな学問であるかの概観をおこなう。

［講義計画］

講義は、次の項目にしたがっておこなう。

1. 資本主義経済の発展と経営学の誕生
2. ドイツ経営学の基本的性格
3. 経営社会学の展開
4. アメリカ経営学の形成と展開
5. 日本的経営論

［成績評価の方法］

期末試験による。

［参考文献］

講義はノート講義を中心におこなうので、参考文献はその都度指示する。「経営社会学の展開」については、参考文献があまりないので、テキストを用いる。

［教科書］

面地豊『西独経営社会学の展開』千倉書房

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
経営学総論	02	通期	4単位	片岡信之

［講義概要・学習目標］

この講義は、皆さんが将来経営学の各論講義で詳しい話を聞く前に、経営学の全般について予め予備知識を持っていることがふさわしいという狙いから設けられています。

したがって、本講義の目標もその点におかれることなります。すなわち、経営学全体について、広く浅くサーベイするということです。しかも、出来るだけ、経営学という学問が面白いものだという感じを持って貰えるように、皆さんを動機づけ出来たらよいと思っています。

［講義計画］

テキストに従って、概ねその順に講義を進めます。

1．企業経営の歴史（アメリカ、日本）
2．企業経営の構造（事業構造、企業構造、経営構造、対境構造）
3．経営管理（管理の基本構造、生産管理、マーケティング、財務管理、労務管理、労使関係管理、インセンティブ・システム、リーダーシップ、情報システム）
4．経営発展（経営環境と経営戦略、経営革新、企業文化、グローバル経営）
5．日本的経営の行方
6．経営学理論の発展史（アメリカ、日本）

［成績評価の方法］

テスト結果による評価とします

［教科書］

片岡信之編著『要説 経営学』文眞堂、1994初版、1997三刷

［参考文献］

●特に指定はしませんが、ポーダブルな経営学辞典を手元に置いておくことを奨めます。常日頃から隙間時間を利用して、ランダムに読んで下さい。

1．吉田和夫・大橋昭一編『基本経営学辞典』中央経済社、1994初版
2．二神恭一編『最新経営学辞典』同文館、1998初版

（両辞典とも，講義担当者（片岡）も執筆陣に参加しています）。

●経営学は様々な知識の総合という特徴があります。『現代用語の基礎知識』（自由国民社）『イミダス』（集英社）『智恵蔵』（朝日新聞社）のうちいずれかを手元に置いて、ランダムに読んで雑学をしてみてください。（3つとも各年版が出ています）。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学総論	０３	通　期	４単位	亀　田　速　穂

［講義概要・学習目標］

この科目が取り扱う内容は、大別して３つの企業経営上の課題領域をめぐって展開されてきている。１つは、人間協働の統率という狭義の管理論の領域に関する研究であり、２つは、さまざまな仕事の規定とそのグループ化およびそれらの相互の関係づけという組織論の領域に関する研究であり、３つは、企業の環境適応をはかる戦略論の領域に関する研究である。

講義では、これら３つの課題領域でどのような具体的内容が展開されているか、歴史的な発展過程に沿って説明し、この作業から明らかになった企業経営の活動内容を、「戦略適合」をキー概念として経営戦略↔組織構造↔管理理論という関連のもとにまとめてみる。そして最後に、安定した経営を誇っていた企業がなぜ大規模な変革に踏み切るのか、企業の変革過程について考え、３つの変革アプローチを示す。企業行動について総合的な理解を深めるところに目標をおく。

［講義計画］

（前期）１　企業行動の総合的理解にむけて
　　２　経営管理論の発展
　　３　組織構造論の展開

（後期）４　経営戦略論の登場
　　５　経営戦略から戦略経営へ
　　６　企業の戦略適合
　　７　企業の安定と変化

［成績評価の方法］

前期はレポート（４００字詰め５枚程度）、後期は試験を課し、両者を総合して成績を評価する。したがって、後期の試験だけでは単位の修得は困難である。なお、出欠状況を評価に加味することがある。

［教科書］

伊藤淳巳・西門正巳・亀田速穂（共著）『現代経営学の生成発展』（白桃書房）

［参考文献］

植村省三（著）『現代の経営学』（中央経済社）
土屋守章（著）『現代企業入門』（日経文庫）

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学総論	０４	通　期	４単位	谷　口　照　三

［講義概要・学習目標］

経営学は、主として企業の構造と行動を歴史社会的環境の下で研究する 。従って、経営学は時代と共にあり、常に「現代経営学」として問題にされる。そこにおいては、「現代の諸問題」に関する一定の理解が必要とされる。経営学を取り巻く「現代の諸問題」の中でとりわけ重要なものは、「環境問題」、「情報化」、「グローバル化」であろう。

本講義では、この様な問題が企業の経営にどの様な変化を迫り、どの様な意味を持っているかに留意しながら、以下のテーマについて講義する。１．経営学の歴史と研究動向、２．企業経営の構造、３．企業の経営管理、４．企業経営の発展、５．企業、非営利組織・非政府組織（ＮＯＰ・ＮＧＯ）、政治・行政のネットワーキング、６．現代経営学の課題と将来への展望

学生諸君は、各テーマの要点を理解すると共に、「現代の諸課題」と「企業経営」が密接に関連していることに留意し、「現代経営学の課題」を明確に意識しなければならない。

［講義計画］

＜前期＞　１．経営学の歴史と研究動向（テキスト１－３章、２４－２６章）
　　２．企業経営の構造（テキスト４章－８章）
　　３．－１　企業の経営管理（テキスト９章）

＜後期＞　３．－２　企業の経営管理（テキスト１０章－１８章）
　　４．企業経営の発展（テキスト１９章－２３章、８章）
　　５．企業、非営利組織・非政府組織、政治・行政のネットワーキング
　　６．現代経営学の課題と将来への展望

［成績評価の方法］

前期と後期の２回の試験と、不定期小テスト、リポートの総合評価。

［教科書］

片岡信之（編著）『要説　経営学』（文眞堂）

［参考文献］

必要に応じて適宜指示する。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学総論	05	通　期	4単位	野　田　俊　範

［講義概要・学習目標］

本講義は、経営学を初めて学ぶ学生を主たる対象とする、いわば「経営学入門」である。と同時に、本学経営学部における企業・経営コースへの導入科目としての性格をも併せもっている。したがって、本講義では経営学の学問的性格を明らかにするとともに、その経営学が研究対象とする企業・経営の基本的原理を概説することとしたい。

本講義は、以下のような学習目標をもっておこなわれる。

①経営学の全体像を体系的に把握すること。
②企業・経営の基本的原理を理解すること。
③現代社会において企業がもつ意義や課題について、各自が主体的に関心をもつこと。

［講義計画］

Ⅰ．経営学とは何か
Ⅱ．企業とは何か
Ⅲ．経営管理の基本問題
Ⅳ．現代社会と企業経営

［成績評価の方法］

前期末および学年末の試験によって評価する。

［教科書］

使用しない。

［参考文献］

橋博・大橋昭一編著『経営学へのアプローチ』ミネルヴァ書房。
中村瑞穂・丸山恵也・権泰吉編著『新版　現代の企業経営－理論と実態』ミネルヴァ書房。
大橋昭一『経営学理論』中央経済社。
その他、必要に応じて適宜指示する。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
情報システム概論 （旧情報処理概論）	02	通　期	4単位	明石　吉三
	03	通　期	4単位	明石　吉三
	04	後期集中	4単位	井上　義祐
	05	通　期	4単位	佐々木　宏
	06	通　期	4単位	牧野　丹奈子
	07	通　期	4単位	牧野　丹奈子

［講義概要・学習目標］

私たちは、コンピュータと通信の利用なしでは過ごせない情報化社会のなかに生きている。この講義では、急速に進展する情報化社会で活躍するために、常識として必要な情報システムの基礎知識を習得する。ハードウェア、ソフトウェア、ソフトウェア開発手法、データベース、通信技術についてその基本を学ぶことを目標とする。

［講義計画］

【前期】
オリエンテーション
コンピュータの歴史・情報表現
ハードウェア構成
コンピュータの処理方式・信頼性

【後期】
ソフトウェア
ソフトウェア開発
ファイルとデータベース
通信ネットワーク
情報化社会の光と陰

［成績評価の方法］

前期試験と後期試験の成績に加え、平常点を総合評価する。

［教科書］

井上義祐・小池俊隆編『経営情報処理概論』同文館

［参考文献］

適宜指示する。

＜B生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
簿記Ⅰ	０２	通　期	４単位	河野　勉

［講義概要・学習目標］

簿記とは帳簿記入のことをさすが、単にそれのみにとどまらず、個人・法人とも１年間の経営活動の結果として決算書（貸借対照表、損益計算書）を作成しなければならない（商法第３２条、商法第２８１条）。
その決算書は、利害関係者（経営者、従業員、債権者、株主、国等）が活用する有用な情報である。今日、この種のディスクロージャー（情報公開）が社会的に必要とされている。決算書は、複式簿記という極めて技術的手法によって誘導される。この原理を学ぶことによって、企業活動の計数的結果である利益の算定方法並びにバランス思考（人生における）を養うことを学習目標とする。

［講義計画］

＜前期＞
１．複式簿記の原理･･･(1)簿記の意義と目的
(2)簿記の要素（資産・負債・資本・費用・収益）
(3)簿記の仕組み(取引・勘定・勘定記入法・貸借平均の原理・勘定科目)
２．仕訳帳と元帳･･･ (1)仕訳と仕訳帳 (2)転記と元帳
３．試算表･････････ (1)試算表の意味と種類 (2)試算表の貸借合計不一致
４．決算（その１）･･ (1)決算の意味と手続 (2)帳簿決算(英米式・大陸式)

＜後期＞
５．取引の記帳･･････(1)現金・預金取引(2)商品売買取引（仕入帳・売上帳商品有高帳・商品売買益の計算）(3)信用取引(4)手形取引（手形の種類・手形の裏書と割引・不渡手形）(5)有価証券取引(6)固定資産取引(7)個人企業の資本取引
６．決算（その２）･･･(1)決算整理の意味(2) 棚卸表(3)棚卸減耗損と商品評価損(4)貸倒引当損と貸倒引当金(5)有価証券評価損(6)減価償却(7)費用・収益の繰延べと見越し(8)精算表

［成績評価の方法］

簿記は計算技術的側面が強いため、適宜計算問題のホームワークを課し、テストを２回実施し、総合的に評価する。尚、日本商工会議所の簿記検定３級に合格した場合は、成績評価に加算する。

［教科書］

中田信正・徐　竜　達・堀　友章・全　在紋（共著）
「現代簿記論」（中央経済社）

［参考文献］

検定簿記講義３級商業簿記
井上　達雄
新井　清光 編著　　中央経済社

検定簿記ワークブック３級商業簿記
井上　達雄
新井　清光 編著　　中央経済社

＜B生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
簿記Ⅰ	０３	通　期	４単位	清　水　信　匡

［講義概要］

初めて簿記・会計を学ぶ学生を対象として複式簿記に基づいた商業簿記の記帳手続きを説明することが本講義の主内容である。その過程で簿記・会計が現代の社会でどのような役立ちを担っているのかも説明する。さらに、会計学にはどのような領域があり、どのようなことが問題になっているかも説明する。なお、随時記帳練習を行う。

［学習目標］

①複式簿記の基礎概念の理解
（資産・負債・資本・収益・費用・利益概念の理解）

②複式簿記の基本的記帳方法の理解

③複式簿記の理解を通じて会計学のイメージをつかむ

［講義計画］

前期

1　複式簿記の基礎概念　2　貸借対照表　3　損益計算書
4　仕訳　5　転記　6　試算表　7　６桁精算表
8　決算　9　複式簿記の役立ち

後期

1　現金・預金　2　三分法　3　仕入帳・売上帳・商品有高帳
4　有価証券　5　貸倒償却　6　減価償却　7　手形
8　費用・収益の繰延の見越　9　８桁精算表　10　決算
11　財務諸表の読み方

［成績評価の方法］

前期・後期の試験で評価する。

［教科書］

中田・徐・堀・全著『現代簿記論』中央経済社1992年
新井清光監修『日商簿記検定　段階式ワークブック』税務経理協会

［参考文献］

＜B生対象＞

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
簿記Ⅰ	04	通期	4単位	徐龍達（ソ ヨン ダル）

［講義概要・学習目標］

商業簿記は「企業の鏡」である。企業の経営成績と財政状態が鏡にうつしだされる。その商業簿記が、どのようにして生成し発展してきたのか歴史的発生史的にとらえ、今日の複式簿記の計算構造を理解するようにしたい。中世イタリアにおける商業の興隆と商業簿記の生成発展、取引の意味と貸借複記（仕訳）、勘定記入、試算表の作成、損益計算書、貸借対照表、精算表の作成と簡単な簿記理論も学ぶことにする。

簿記は、自動車の運転免許の取得と同じように、さぼらずに出席することが必要である。欠席しがちな学生は単位の取得がむつかしい。

［講義計画］

（前期）① 簿記計算思考の生成発展
② ヨーロッパにおける複式簿記の成立と発展
③ 複式簿記の計算原理
④ 複式簿記の計算原理

（後期）⑤ 勘定科目概説
⑥ 現金・預金
⑦ 売掛金・買掛金
⑧ 受取手形・支払手形
⑨ 商品と評価
⑩ 決算と帳簿組織

［成績評価の方法］

前期テストと年度末テストを総合して評価するが、日本商工会議所簿記検定試験3級以上に合格した者は、合格証書のコピー提出により、評価を1ランク引きあげる。

［参考文献］

［教科書］

中田信正・徐 龍 達・堀 友章・全 在紋（共著）『現代簿記論』（中央経済社）

＜B生対象＞

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
簿記Ⅰ	05 06	通期 前期集中	4単位 4単位	全在紋（チョン ジェ ムン）

［講義概要・学習目標］

（講義概要）

リトルトンという会計学者は、「会計」を「企業の言語」とたとえた。日本人が日本語で話し、アメリカ人が英語で話すように、「企業人」は会計で話しをすると見たのである。この伝で言えば、「簿記」は企業の言語(会計)の「文法」だと言えよう。英語の文法が面白くないように、簿記の学習もまた、学生諸君にはとかく敬遠されがちである。しかし、将来企業人として指導的立場に立たねばならない経営学部卒業生には、簿記の習熟は避けて通れない関所といってよい。

（学習目標）

① 複式簿記の計算原理・計算構造について理解する。
② 財務諸表を構成する勘定諸科目の会計的意義を理解する。
③ 複式簿記システムでの会計的取引の記帳方法を習得する。
④ 決算手続きを理解し、損益計算書・貸借対照表の作り方を学ぶ。

［講義計画］

① オリエンテーション（2回）
② 複式簿記の計算原理（3回）
③ 複式簿記の計算構造（4回）
④ 複式簿記の記帳練習（3回）
⑤ 現金・当座預金の処理（2回）
⑥ 売上・仕入の処理（3回）
⑦ 繰越商品・売上原価の算定（2回）
⑧ その他の勘定の処理（1回）
⑨ 決算整理事項の処理（3回）
⑩ 精算表・財務諸表の作成（2回）

［成績評価の方法］

授業の出席状況、課題（宿題）の達成状況、および筆記試験（前期末試験・学年末試験各1回）の総合点で評価する。なお、日本商工会議所簿記検定試験3級以上の合格者には、別途加点評価する。

［参考文献］

井上達雄・新井清光（共著）『検定簿記ワークブック（3級・商業簿記）』（中央経済社）

［教科書］

中田信正・徐 龍 達・堀 友章・全 在紋（共著）『現代簿記論』（中央経済社）

＜B生対象＞

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
簿記Ⅰ	07 08	通期 通期	4単位 4単位	パク テヨン 朴 大栄

［講義概要・学習目標］

今日の経済社会の発展は、簿記の利用なくしては不可能であったと断言しても過言ではない。この意味で、簿記はたんに会計学のみならず、経営学、経済学、その他の基礎としても必要不可欠な学習科目の一つである。

簿記は決して難解な科目ではないが、これをマスターするためには、不断の記帳練習が必要である。したがって、本試験以外に毎回できるだけ数多くの練習問題をレポート提出という方法で行わせる予定である。

本講義は、個人商店の決算諸表の作成までをマスターさせることを目標としている。ただ、大学に学ぶ以上、その背後に流れる思考の理解も目標としたい。

［講義計画］

4月　複式簿記の意義と原理

4-7月　複式簿記の計算構造（取引の意義と種類、勘定と仕訳、仕訳帳と元帳、試算表、精算表、決算と財務諸表）

9-11月　個別会計処理（現金、当座預金、商品売買と売掛金・買掛金、受取手形と支払手形、商品、その他の勘定）

12-1月　決算

［成績評価の方法］

前期・後期の筆記試験の成績にレポートの提出状況と出席状況を加味して評価する。

［参考文献］

必要があれば、適宜指示する。

［教科書］

中田信正・徐龍達・堀友章・全在紋共著　『現代簿記論』　中央経済社

井上達雄・新井清光編著　『検定簿記ワークブック　3級』　中央経済社

＜編入生対象＞

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
経営学部基礎演習	01	通期	4単位	面地 豊

［演習概要・学習目標］

社会科学は、社会に住む人の「よりくらし」を基本的に目ざしている。「よりくらし」の基本的条件として、環境は重要である。本年度は、環境問題を取りあげて学習する。

［演習計画］

石弘之著『地球環境報告』（岩波新書）を輪読。演習生にその内容を報告してもらって、その内容をめぐって討論をする。

レポートの提出を求める。

［成績評価の方法］

レポートおよび、日常の学習による。

［参考文献］

その都度指示する。

［教科書］

石弘之著『地球環境報告』岩波新書。

＜９８Ｂ生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学部基礎演習	０２ ０３	通　期 通　期	４単位 ４単位	今　木　秀　和

［演習概要・学習目標］

日本を代表する一流企業と考えられている大企業のトップの人たちが、フラッシュの閃光を浴びながら深々と頭を下げる。そんな光景を何度見せつけられたことだろう。組織を維持するため、社会の常識からズレてしまった「一流」企業のむなしさ。会社って、一体なんだろう。
経営学は企業（会社）の構造や行動を分析する社会科学である。それを理解するためには、社会をリアルに見つめ、考え、分析する態度と能力が必要であるが、それはそんなに容易なことではない。この科目はそのための入門ゼミナールである。具体的には、次のような学習目標をもっておこなわれる。
①社会を分析するためのものの見方・考え方を学ぶこと。
②経営学に接近するためのテーマを探し求めること。
③自分の意見を発表し、他人の意見を理解するという姿勢を身につけること。
④カリキュラムを理解し、コース選択の準備をすること。
まずは、「新しい知識」を得るだけでなく、それを社会の動きの中で考え、議論することから出発しよう。

［演習計画］

〈前期〉経営学の基礎知識を修得するため、数回にわたって講述する。
レポート、小論文の書き方を学ぶ。
パラダイム変革という視点から、現代社会のなかにおける企業の変革を学ぶ。

〈後期〉日本企業の経営の現状を知ることに努める。
雑誌や新聞記事等から日本企業の経営の現状を示すデータを収集する。
それらのデータに基づいて小論文の作成をめざす。

［成績評価の方法］

数回にわたってレポートを書いてもらう。年度末に小論文の提出を求める。提出物によって評価する。
出席を義務づける。（出席点は加点要素とする。）

［教科書］

加護野忠男（著）『企業のパラダイム変革』（講談社現代新書）
日経ビジネス（編）『小さな本社～経営革新への挑戦－』（日本経済新聞社）

［参考文献］

榊原清則（著）『企業ドメインの戦略論』（中公新書）
野中郁次郎　他（共著）『企業の自己革新』（中央公論社）
奥村昭博（著）『企業イノベーションへの挑戦』（日本経済新聞社）
竹内弘高（著）『ベスト・プラクティス革命』（ダイヤモンド社）
野中郁次郎・竹内弘高（共著）『知識創造企業』（東洋経済新聞社）

＜９８Ｂ生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学部基礎演習	０４ ０５	通　期 通　期	４単位 ４単位	岡　崎　守　男

［演習概要・学習目標］

日本を代表する一流企業と考えられている大企業のトップの人たちが、フラッシュの閃光を浴びながら深々と頭を下げる。そんな光景を何度見せつけられたことだろう。組織を維持するため、社会の常識からズレてしまった「一流」企業のむなしさ。会社って、一体なんだろう。
経営学は企業（会社）の構造や行動を分析する社会科学である。それを理解するためには、社会をリアルに見つめ、考え、分析する態度と能力が必要であるが、それはそんなに容易なことではない。この科目はそのための入門ゼミナールである。具体的には、次のような学習目標をもっておこなわれる。
①社会を分析するためのものの見方・考え方を学ぶこと。
②経営学に接近するためのテーマを探し求めること。
③自分の意見を発表し、他人の意見を理解するという姿勢を身につけること。
④カリキュラムを理解し、コース選択の準備をすること。
まずは、「新しい知識」を得るだけでなく、それを社会の動きの中で考え、議論することから出発しよう。

［演習計画］

〈前期〉テキストを使った勉強については、とくにどこまで進むかといった計画は設けない。こちらから脱線するし、諸君のほうから大いに質問をして、脱線させてもらってもよい。ただ諸君にとっては初めての大学生活でもあるので、できるかぎりそのガイダンスにも時間をとりたい。また、なるべく前期中にパソコンの実習を行う予定である。

〈後期〉上述のことに加えて、２、３回くらいはチャップリンの「モダンタイムス」など映画、ドキュメントのビデオの鑑賞を行う。そして、その内容の紹介、感想などを盛ったレポートを提出してもらう。

［成績評価の方法］

出席は義務づける。従って欠席や遅刻がかさなると除籍になる。成績の評価は、出席を前提として、こちらから求めた課題（テキストのレジュメやレポートの作成など）にどれだけ応えているか、その内容はどうかを判断して行う。

［教科書］

下川浩一（著）『日本の企業発展史』（講談社現代新書）

［参考文献］

朝日新聞社（編）『カイシャ大国』（朝日文庫）

＜９８Ｂ生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学部基礎演習	０６	通　期	４単位	鬼　塚　光　政

［演習概要・学習目標］

日本を代表する一流企業と考えられている大企業のトップの人たちが、フラッシュの閃光を浴びながら深々と頭を下げる。そんな光景を何度見せつけられたことだろう。組織を維持するため、社会の常識からズレてしまった「一流」企業のむなしさ。会社って、一体なんだろう。
経営学は企業（会社）の構造や行動を分析する社会科学である。それを理解するためには、社会をリアルに見つめ、考え、分析する態度と能力が必要であるが、それはそんなに容易なことではない。この科目はそのための入門ゼミナールである。具体的には、次のような学習目標をもっておこなわれる。
①社会を分析するためのものの見方・考え方を学ぶこと。
②経営学に接近するためのテーマを探し求めること。
③自分の意見を発表し、他人の意見を理解するという姿勢を身につけること。
④カリキュラムを理解し、コース選択の準備をすること。
まずは、「新しい知識」を得るだけでなく、それを社会の動きの中で考え、議論することから出発しよう。

［演習計画］

＜前期＞
1．経営学部の専門科目の概要と体系および履修要領の説明
2．図書館と計算機センターの利用方法の説明
3．経営学の主たる研究対象である企業が現代社会において占めている位置や影響力や直面している課題について考察しながら、経営学を学習する意味を感得する。
＜前期＞
4．企業の仕組み（「企業形態」）と運営（「経営管理」）に関する問題を理解するための考え方や基礎的な概念を習得して経営学の専門的な学習に備える。

＊１～２回ゲスト講師を招き、経営国際化や環境問題等現代企業が直面している重要な問題について討議することも考えている。

［成績評価の方法］

出席、レポート、授業中の発表・発言、テストの成績等を総合的に勘案する。

［教科書］

追って指示する。

［参考文献］

内橋克人・奥村宏・佐高信編、『企業社会のゆくえ』、岩波書店
内橋克人・奥村宏・佐高信編、『日本型経営と国際社会』、岩波書店
片岡信之編著、『要説　経営学』、文真堂
赤岡功　編、『現代経営学を学ぶ』、世界思想社
橋博／大橋昭一編著、『経営学へのアプローチ』、ミネルバ書房

＜９８Ｂ生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学部基礎演習	０７	通期	４単位	佐々木　宏

［講義概要・学習目標］

日本を代表する一流企業と考えられている大企業のトップの人たちが、フラッシュの閃光を浴びながら深々と頭を下げる。そんな光景を何度見せつけられたことだろう。組織を維持するため、社会の常識からズレてしまった「一流」企業のむなしさ。会社って、一体なんだろう。
経営学は企業（会社）の構造や行動を分析する社会科学である。それを理解するためには、社会をリアルに見つめ、考え、分析する態度と能力が必要であるが、それはそんなに容易なことではない。この科目はそのための入門ゼミナールである。具体的には、次のような学習目標をもっておこなわれる。
①社会を分析するためのものの見方・考え方を学ぶこと。
②経営学に接近するためのテーマを探し求めること。
③自分の意見を発表し、他人の意見を理解するという姿勢を身につけること。
④カリキュラムを理解し、コース選択の準備をすること。
まずは、「新しい知識」を得るだけでなく、それを社会の動きの中で考え、議論することから出発しよう。

［講義計画］

前期は、パソコンの練習を行いながら、プレゼンテーションのしかたを身につける。後期は、経営学に関する文献研究を行い、順番に報告を行う。

［成績評価の方法］

レポート、平常点（報告、出席状況）

［教科書］

加護野忠男・伊丹敬之　『経営学ゼミナール』日本経済新聞社

［参考文献］

適宜紹介する。

＜９８Ｂ生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学部基礎演習	０８ ０９	通　期 通　期	４単位 ４単位	清　水　信　匡

［演習概要・学習目標］

日本を代表する一流企業と考えられている大企業のトップの人たちが、フラッシュの閃光を浴びながら深々と頭を下げる。そんな光景を何度見せつけられたことだろう。組織を維持するため、社会の常識からズレてしまった「一流」企業のむなしさ。会社って、一体なんだろう。
経営学は企業（会社）の構造や行動を分析する社会科学である。それを理解するためには、社会をリアルに見つめ、考え、分析する態度と能力が必要であるが、それはそんなに容易なことではない。この科目はそのための入門ゼミナールである。具体的には、次のような学習目標をもっておこなわれる。
①社会を分析するためのものの見方・考え方を学ぶこと。
②経営学に接近するためのテーマを探し求めること。
③自分の意見を発表し、他人の意見を理解するという姿勢を身につけること。
④カリキュラムを理解し、コース選択の準備をすること。
まずは、「新しい知識」を得るだけでなく、それを社会の動きの中で考え、議論することから出発しよう。

［演習計画］

前期
1　論文とは何かを『論文の書き方』を読みながら理解する。
2　グループごとに適当なテーマを設定し、それについてまとめる。
3　2においてまとめたことを発表し、討論する。

後期
1　『経営学入門』第１部を読むことで企業と環境との関係を理解する。
2　前期で理解した論文の書き方を応用し、自らの興味のある組織の戦略分析を行い、論文にまとめる。

［成績評価の方法］
夏休みと冬休みの課題を主たる評価対象とする。なお、出席状況、授業における発言等も評価に加味する。

［参考文献］

澤田昭夫著『論文のレトリック』（講談社学術文庫604）講談社1983年

［教科書］

澤田昭夫著『論文の書き方』（講談社学術文庫153）講談社1977年
伊丹敬之・加護野忠夫著『ゼミナール経営学入門（改訂版）』
日本経済新聞社1993年

＜９８Ｂ生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学部基礎演習	１０	通 期	４単位	谷　口　照　三

［講義概要・学習目標］

日本を代表する一流企業と考えられている大企業のトップの人たちが、フラッシュの閃光を浴びながら深々と頭を下げる。そんな光景を何度見せつけられたことだろう。組織を維持するため、社会の常識からズレてしまった「一流」企業のむなしさ。会社って、一体なんだろう。
経営学は企業（会社）の構造や行動を分析する社会科学である。それを理解するためには、社会をリアルに見つめ、考え、分析する態度と能力が必要であるが、それはそんなに容易なことではない。この科目はそのための入門ゼミナールである。具体的には、次のような学習目標をもっておこなわれる。
①社会を分析するためのものの見方・考え方を学ぶこと。
②経営学に接近するためのテーマを探し求めること。
③自分の意見を発表し、他人の意見を理解するという姿勢を身につけること。
④カリキュラムを理解し、コース選択の準備をすること。
まずは、「新しい知識」を得るだけでなく、それを社会の動きの中で考え、議論することから出発しよう。

［講義計画］

＜前期＞1．大学生に必要な基礎的な学習テクニック（リポート、レジュメの作成や報告の仕方など）を修得する。テキスト① を使用。
2．今起こりつつある社会変動と２１世紀に期待される企業の責任と役割についての概要を学ぶ。テキスト②と配付資料を使用。
3．図書館での情報検索実習と計算機センターでの電気計算機実習を行う。

＜後期＞1．ケース・メソッド（事例を用いた意思決定訓練）、ワーク・ショップ（グループによる課題研究）を実施する。テキスト①②および配付資料を使用。
2．適当な時期に履修指導を行う。

［成績評価の方法］
出席点と出席内容点５０点、課題提出点とその内容点５０点の合計点で評価する。なお、課題には、適時課すもの（１０数回）と最後に提出してもらう小論文（１万字前後）がある。

［参考文献］

必要に応じて適宜指示する。

［教科書］

① 森　靖雄（著）『大学生の学習テクニック』（大月書店）
② ジョエル・マコワー（著）『社会貢献型経営ノすすめ』（シュプリンガー・フェアラーク東京）

＜９８Ｂ生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学部基礎演習	１１	通期	４単位	野　田　俊　範

［演習概要・学習目標］

日本を代表する一流企業と考えられている大企業のトップの人たちが、フラッシュの閃光を浴びながら深々と頭を下げる。そんな光景を何度見せつけられたことだろう。組織を維持するため、社会の常識からズレてしまった「一流」企業のむなしさ。会社って、一体なんだろう。
経営学は企業（会社）の構造や行動を分析する社会科学である。それを理解するためには、社会をリアルに見つめ、考え、分析する態度と能力が必要であるが、それはそんなに容易なことではない。この科目はそのための入門ゼミナールである。具体的には、次のような学習目標をもっておこなわれる。
①社会を分析するためのものの見方・考え方を学ぶこと。
②経営学に接近するためのテーマを探し求めること。
③自分の意見を発表し、他人の意見を理解するという姿勢を身につけること。
④カリキュラムを理解し、コース選択の準備をすること。
まずは、「新しい知識」を得るだけでなく、それを社会の動きの中で考え、議論することから出発しよう。

［演習計画］
①教科書を用いて現代の社会について考える。
②新聞・雑誌などの資料を用いて現代の企業経営について考える。
以上の課題に関して、学生による報告・質疑・討論を中心にして進めてゆく。

［成績評価の方法］
①出席状況②報告および質疑・討論への参加状況③レポート
以上をもとにして、総合的に評価する。

［参考文献］
適宜指示する。

［教科書］
適宜指示する。

＜９８Ｂ生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学部基礎演習	１２	通　期	４単位	長谷川　彰

［演習概要・学習目標］

日本を代表する一流企業と考えられている大企業のトップの人たちが、フラッシュの閃光を浴びながら深々と頭を下げる。そんな光景を何度見せつけられたことだろう。組織を維持するため、社会の常識からズレてしまった「一流」企業のむなしさ。会社って、一体なんだろう。
経営学は企業（会社）の構造や行動を分析する社会科学である。それを理解するためには、社会をリアルに見つめ、考え、分析する態度と能力が必要であるが、それはそんなに容易なことではない。この科目はそのための入門ゼミナールである。具体的には、次のような学習目標をもっておこなわれる。
①社会を分析するためのものの見方・考え方を学ぶこと。
②経営学に接近するためのテーマを探し求めること。
③自分の意見を発表し、他人の意見を理解するという姿勢を身につけること。
④カリキュラムを理解し、コース選択の準備をすること。
まずは、「新しい知識」を得るだけでなく、それを社会の動きの中で考え、議論することから出発しよう。

［演習計画］

［成績評価の方法］
前期テストおよび学年末テストの結果による。

［参考文献］
橋本寿朗『戦後の日本経済』
岩波新書

［教科書］
特に指定しない。

「経営学部文献講読」クラス一覧

クラス	担当者	頁	クラス	担当者	頁
01	李　健泳	270	08	津戸　正廣	273
02	太田　一朗	270	09	太田　一朗	270
03	太田　雅晴	271	10	矢倉　伸太郎	273
04	坂上　学	271	11	梁　官洙	274
05	柴　理梨亜	272	12	本多　毅	274
06	高橋　敏朗	272	13	本多　毅	275
07	高橋　敏朗	272			

〔注意〕

(1) ゼミナール形式で授業を行うため、定員を30名とするが、予備登録（先着順受付）によって受講者の決定を行う。

(2) どのクラスも出席を重視する。一定の成果を上げるためには、授業への継続的な出席が欠かせないからである。

(3) 学則上、この科目は、経営学部教育科目の学部共通選択科目（4単位）に位置づけられている。

(4) 募集は次の日程で実施する。

〈日　時〉　3月23日（月）　9時20分～15時00分

〈申込受付〉　学務課窓口

〈注〉曜日・時限、時間割コードについては、授業時間割表でよく確認すること。

＜９７Ｂ生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学部文献講読	０１	通期	４単位	李健泳（イコンヨン）

［講義概要・学習目標］

経営学部で学ぶ専門分野に関する日本語の文献を読むことをつうじて、「経営学」の勉強が「おもしろい！」「ひとつまじめにやってみよう！」と思ってくれることを期待しています。それぞれの文献が日本や世界の企業社会の「現実」とどのように取り組んでいるのか、筆者の見方や考え方はどうなのか、どのようなアプローチやスタイルで本やペーパーにまとめているのか等々を文献を読むことをつうじて学んでほしいのです。やがて専門ゼミでより深く勉強することになりますが、問題意識を明確にし、各自の研究テーマを発見するように努めてほしいのです。勉強したことを「書いてまとめてみる」「人前で口頭発表してみる」「意見をかわしてみる」ことが皆さんの潜在力を顕在化し、実力を飛躍的に高めることになるでしょう。目標は高いのです。①ものの見方・考え方を学ぶこと　②テーマを発見すること　③書く力・発表する力をつけること　④社会的関心を高めること。

［講義計画］

＜前期＞　論理的な話し方とは何かを議論し、その構造を学ぶ。
全員が授業に参加できるように、グループ分けを行ない、グループ間のディベートを通して、論理的な話し方を習得させる。さらに、多様な事実から新しい意味を見出すKJ法に関して学び、ディベートに活かす。

＜後期＞　企業実務における諸管理技法を学ぶ。
前期のディベートで学んだ論理的な話し方および質問のやり方を活かし、企業実務における諸管理技法の内容が理解できるように、質問を繰り返しながら答えを見つける方法を取る。

［成績評価の方法］

出席率、ディベートへの参加度、レポートなどを総合勘案して評価する。

［参考文献］

［教科書］

小野田博一（著）、論理的に話す方法、（日本実業出版社）

＜９７Ｂ生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学部文献講読	０２ ０９	通　期 通　期	４単位 ４単位	太　田　一　朗

［講義概要・学習目標］

経営学部で学ぶ専門分野に関する日本語の文献を読むことをつうじて、「経営学」の勉強が「おもしろい！」「ひとつまじめにやってみよう！」と思ってくれることを期待しています。それぞれの文献が日本や世界の企業社会の「現実」とどのように取り組んでいるのか、筆者の見方や考え方はどうなのか、どのようなアプローチやスタイルで本やペーパーにまとめているのか等々を文献を読むことをつうじて学んでほしいのです。やがて専門ゼミでより深く勉強することになりますが、問題意識を明確にし、各自の研究テーマを発見するように努めてほしいのです。勉強したことを「書いてまとめてみる」「人前で口頭発表してみる」「意見をかわしてみる」ことが皆さんの潜在力を顕在化し、実力を飛躍的に高めることになるでしょう。目標は高いのです。①ものの見方・考え方を学ぶこと　②テーマを発見すること　③書く力・発表する力をつけること　④社会的関心を高めること。

［講義計画］

ビジネスの国際展開について学ぶ。

<前期>
国際マーケティングを中心に市場開発、商品開発、価格戦略などについて読む。

<後期>
国際貿易の現状に就いて学習する。実務・政策・理論など学習する。

［成績評価の方法］

クラス出席とクラスでの発表による。補完的にレポートを求める事もある。

［参考文献］

［教科書］

適宜指示、または配布する

＜９７Ｂ生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学部文献講読	０３	通　期	４単位	太田雅晴

［講義概要・学習目標］

経営学部で学ぶ専門分野に関する日本語の文献を読むことをつうじて、「経営学」の勉強が「おもしろい！」「ひとつまじめにやってみよう！」と思ってくれることを期待しています。それぞれの文献が日本や世界の企業社会の「現実」とどのように取り組んでいるのか、筆者の見方や考え方はどうなのか、どのようなアプローチやスタイルで本やペーパーにまとめているのか等々を文献を読むことをつうじて学んでほしいのです。やがて専門ゼミでより深く勉強することになりますが、問題意識を明確にし、各自の研究テーマを発見するように努めてほしいのです。勉強したことを「書いてまとめてみる」「人前で口頭発表してみる」「意見をかわしてみる」ことが皆さんの潜在力を顕在化し、実力を飛躍的に高めることになるでしょう。目標は高いのです。①ものの見方・考え方を学ぶこと　②テーマを発見すること　③書く力・発表する力をつけること　④社会的関心を高めること。

［講義計画］

各人の分担箇所を指定します。報告当日までにそれを読み、そして報告資料に概要をまとめます。報告当日では、その資料を全員に配布し、発表するとともに、発表後、全員で討論します。
できるのであれば、オーバーヘッドプロジェクターやコンピュータを用いた発表も体験してみたいと思います。

［成績評価の方法］

出席状況、発表態度、レポートの結果を総合して評価します。

［参考文献］

講義開始時および必要時に指示します。

［教科書］

講義開始時および必要時に指示します。

＜９７Ｂ生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学部文献講読	０４	通　期	４単位	坂　上　学

［講義概要・学習目標］

経営学部で学ぶ専門分野に関する日本語の文献を読むことをつうじて、「経営学」の勉強が「おもしろい！」「ひとつまじめにやってみよう！」と思ってくれることを期待しています。それぞれの文献が日本や世界の企業社会の「現実」とどのように取り組んでいるのか、筆者の見方や考え方はどうなのか、どのようなアプローチやスタイルで本やペーパーにまとめているのか等々を文献を読むことをつうじて学んでほしいのです。やがて専門ゼミでより深く勉強することになりますが、問題意識を明確にし、各自の研究テーマを発見するように努めてほしいのです。勉強したことを「書いてまとめてみる」「人前で口頭発表してみる」「意見をかわしてみる」ことが皆さんの潜在力を顕在化し、実力を飛躍的に高めることになるでしょう。目標は高いのです。①ものの見方・考え方を学ぶこと　②テーマを発見すること　③書く力・発表する力をつけること　④社会的関心を高めること。

［講義計画］

グローバル経営における会計の課題をテーマに、テキストを用いて議論をおこなう。最初にいくつかのグループに分け、グループごとに担当箇所を発表する。最後にレポート課題を課す予定である。講義の性格上、平常点を重視するので積極的に参加する意欲のある学生を望む。

［成績評価の方法］

平常点（出席・発表）とレポート課題

［参考文献］

必要に応じて適宜紹介する。

［教科書］

吉田寛・柴健次編著『グローバル経営会計論』（税務経理協会）

＜９７Ｂ生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学部文献講読	０５	通　期	４単位	柴　理梨亜

［講義概要・学習目標］

経営学部で学ぶ専門分野に関する日本語の文献を読むことをつうじて、「経営学」の勉強が「おもしろい！」「ひとつまじめにやってみよう！」と思ってくれることを期待しています。それぞれの文献が日本や世界の企業社会の「現実」とどのように取り組んでいるのか、筆者の見方や考え方はどうなのか、どのようなアプローチやスタイルで本やペーパーにまとめているのか等々を文献を読むことをつうじて学んでほしいのです。やがて専門ゼミでより深く勉強することになりますが、問題意識を明確にし、各自の研究テーマを発見するように努めてほしいのです。勉強したことを「書いてまとめてみる」「人前で口頭発表してみる」「意見をかわしてみる」ことが皆さんの潜在力を顕在化し、実力を飛躍的に高めることになるでしょう。目標は高いのです。①ものの見方・考え方を学ぶこと　②テーマを発見すること　③書く力・発表する力をつけること　④社会的関心を高めること。

［講義計画］

（前期）
１．重要性（コカ・コーラ ）
２．創造　（ギネス）
３．管理　（ネスレ）
４．重要性ー品質（マーケット・ドリヴン・クオリティ）
５．価値の付与（グランド・メトロポリタン）
６．自動車産業　（ベンツ）
７．小売りパワー（テスコ）

（後期）
８．バラ荷ーブランド　（ガルバーニ）
９．フランチャイシング　（ベネトン）
１０．保護　（マース）
１１．日本　（マルハ）

［成績評価の方法］

平常の報告内容、レポート、クラスでの発表を総合的に評価する。

［参考文献］

デービッド・Ａ・アーカー（著）陶山・小林・梅本・石垣（訳）「ブランド優位の戦略ー顧客を創造するＢＩの開発と実践」（ダイヤモンド社、1997）

［教科書］

Ｐ．ストバート（編）岡田依里（訳）「ブランド・パワー、最強の国際商標」（日本経済評論社、1996）

＜９７Ｂ生対象＞

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学部文献講読	０６ ０７	通　期 通　期	４単位 ４単位	高橋敏朗

［講義概要・学習目標］

経営学部で学ぶ専門分野に関する日本語の文献を読むことをつうじて、「経営学」の勉強が「おもしろい！」「ひとつまじめにやってみよう！」と思ってくれることを期待しています。それぞれの文献が日本や世界の企業社会の「現実」とどのように取り組んでいるのか、筆者の見方や考え方はどうなのか、どのようなアプローチやスタイルで本やペーパーにまとめているのか等々を文献を読むことをつうじて学んでほしいのです。やがて専門ゼミでより深く勉強することになりますが、問題意識を明確にし、各自の研究テーマを発見するように努めてほしいのです。勉強したことを「書いてまとめてみる」「人前で口頭発表してみる」「意見をかわしてみる」ことが皆さんの潜在力を顕在化し、実力を飛躍的に高めることになるでしょう。目標は高いのです。①ものの見方・考え方を学ぶこと　②テーマを発見すること　③書く力・発表する力をつけること　④社会的関心を高めること。

［講義計画］

章・節毎に内容を理解するとともに、現代企業の経営組織に照らして、内容理解を具体的に進めていく。発表者を事前に指名するなどして、ゼミナールのような形式と講義形式とを折衷した形でクラスを進めていきたい。

［成績評価の方法］

出席・発表・試験で総合評価する。

［参考文献］

岡本康雄著『現代の経営組織』日経文庫

［教科書］

飯野春樹編『経営者の役割』有斐閣新書

＜９７Ｂ生対象＞

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
経営学部文献講読	08	通期	4単位	津戸正廣

［講義概要・学習目標］

経営学部で学ぶ専門分野に関する日本語の文献を読むことをつうじて、「経営学」の勉強が「おもしろい！」「ひとつまじめにやってみよう！」と思ってくれることを期待しています。それぞれの文献が日本や世界の企業社会の「現実」とどのように取り組んでいるのか、筆者の見方や考え方はどうなのか、どのようなアプローチやスタイルで本やペーパーにまとめているのか等々を文献を読むことをつうじて学んでほしいのです。やがて専門ゼミでより深く勉強することになりますが、問題意識を明確にし、各自の研究テーマを発見するように努めてほしいのです。勉強したことを「書いてまとめてみる」「人前で口頭発表してみる」「意見をかわしてみる」ことが皆さんの潜在力を顕在化し、実力を飛躍的に高めることになるでしょう。目標は高いのです。①ものの見方・考え方を学ぶこと　②テーマを発見すること　③書く力・発表する力をつけること　④社会的関心を高めること。

［講義計画］

4月および5月は，経営学の基礎に関する説明と質疑応答を中心にします。そのため，できる限り基本的な話題を取り上げます。

6月および7月は，経営学でしばしば議論される定番の諸問題を取り扱い，討論を深めていきます。

夏休みには，各自興味のあるテーマを見つけて，レポートを作成してもらいます。

9月および10月は，受講生が作成したレポートを順次報告してもらいながら，報告の仕方と報告の聴き方を練習します。自ら作成したレポートを基盤にしているので，討論にも熱が入ります。必要に応じて，新聞や雑誌の記事をさらに補充して，議論を豊かにしていきます。

11月から1月までは，各自で作成したレポートに含まれている不備な点を探し出し，さらに完成したレポートに仕上げることを目指します。

以上の作業は，慣れてくるとなかなか楽しいものになります。

日頃から，新聞・雑誌などの記事，テレビなどによる報道に親しんでおいてください。

［成績評価の方法］

授業への出席を最も重視します。夏休みにはレポート作成を課します。討論の熱意，積極的な質問，レポートの充実度などを総合的に判断して評価します。

［参考文献］

必要に応じて，指示します。

［教科書］

授業の際に，プリントを配付します。

＜９７Ｂ生対象＞

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
経営学部文献講読	１０	通　期	4単位	矢　倉　伸太郎

［講義概要・学習目標］

経営学部で学ぶ専門分野に関する日本語の文献を読むことをつうじて、「経営学」の勉強が「おもしろい！」「ひとつまじめにやってみよう！」と思ってくれることを期待しています。それぞれの文献が日本や世界の企業社会の「現実」とどのように取り組んでいるのか、筆者の見方や考え方はどうなのか、どのようなアプローチやスタイルで本やペーパーにまとめているのか等々を文献を読むことをつうじて学んでほしいのです。やがて専門ゼミでより深く勉強することになりますが、問題意識を明確にし、各自の研究テーマを発見するように努めてほしいのです。勉強したことを「書いてまとめてみる」「人前で口頭発表してみる」「意見をかわしてみる」ことが皆さんの潜在力を顕在化し、実力を飛躍的に高めることになるでしょう。目標は高いのです。①ものの見方・考え方を学ぶこと　②テーマを発見すること　③書く力・発表する力をつけること　④社会的関心を高めること。

［講義計画］

〈前期〉

後述の『ベーシック　会社入門』をテキストにして，現代企業の諸側面についての理解を深めます。

〈後期〉

後述の『ベーシック　経営入門』をテキストとして，現代企業の諸側面のうちとくに，その経営活動面についての理解を，さらに深めて行きたいと思います。

［成績評価の方法］

出席を重視すると共に，レポートを提出していただきます。また，後期末にはテストを行ないます。

それゆえ，成績は，出席，レポートとテストとを総合的に評価して決めます。

［参考文献］

必要があれば紹介します。

［教科書］

〈前期〉

日本経済新聞社編『ベーシック　会社入門』　同社
１９９４年（２版）（日経文庫　６０８）

〈後期〉

日本経済新聞社編『ベーシック　経営入門』　同社
１９９０年　（日経文庫　６１６）

＜９７Ｂ生対象＞

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
経営学部文献講読	１１	通期	４単位	梁（ヤン） 官洙（カンス）

［講義概要・学習目標］

経営学部で学ぶ専門分野に関する日本語の文献を読むことをつうじて、「経営学」の勉強が「おもしろい！」「ひとつまじめにやってみよう！」と思ってくれることを期待しています。それぞれの文献が日本や世界の企業社会の「現実」とどのように取り組んでいるのか、筆者の見方や考え方はどうなのか、どのようなアプローチやスタイルで本やペーパーにまとめているのか等々を文献を読むことをつうじて学んでほしいのです。やがて専門ゼミでより深く勉強することになりますが、問題意識を明確にし、各自の研究テーマを発見するように努めてほしいのです。勉強したことを「書いてまとめてみる」「人前で口頭発表してみる」「意見をかわしてみる」ことが皆さんの潜在力を顕在化し、実力を飛躍的に高めることになるでしょう。目標は高いのです。①ものの見方・考え方を学ぶこと　②テーマを発見すること　③書く力・発表する力をつけること　④社会的関心を高めること。

［講義計画］

［講義計画］労務管理の日韓比較
1．労務管理の発展過程
2．雇用管理
3．教育・訓練管理
4．作業条件管理
5．賃金管理
6．福利厚生管理
7．労働の人間化

［成績評価の方法］

出席、授業時の態度、レポート、期末試験を総合して評価

［参考文献］

牧戸孝郎編著 「岐路に立つ韓国企業経営」名古屋大学出版会、1994
白 弼圭 著 「韓国労使関係の新構造」日本経済評論社、1996

［教科書］

佐護譽・安春植 「労務管理の日韓比較」有斐閣、1993初版

＜９７Ｂ生対象＞

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
経営学部文献講読	１２	通期	４単位	本多 毅

［講義概要・学習目標］

経営学部で学ぶ専門分野に関する日本語の文献を読むことをつうじて、「経営学」の勉強が「おもしろい！」「ひとつまじめにやってみよう！」と思ってくれることを期待しています。それぞれの文献が日本や世界の企業社会の「現実」とどのように取り組んでいるのか、筆者の見方や考え方はどうなのか、どのようなアプローチやスタイルで本やペーパーにまとめているのか等々を文献を読むことをつうじて学んでほしいのです。やがて専門ゼミでより深く勉強することになりますが、問題意識を明確にし、各自の研究テーマを発見するように努めてほしいのです。勉強したことを「書いてまとめてみる」「人前で口頭発表してみる」「意見をかわしてみる」ことが皆さんの潜在力を顕在化し、実力を飛躍的に高めることになるでしょう。目標は高いのです。①ものの見方・考え方を学ぶこと　②テーマを発見すること　③書く力・発表する力をつけること　④社会的関心を高めること。

［講義計画］

基本的にテキストの章構成にしたがってじっくりとすすめていく予定。必要に応じて予備知識（他分野）の修得も考慮していく。
詳細については、初回の講義時に触れる予定。

［成績評価の方法］

出席状況、レポート、小テスト等の総合評価

［参考文献］

授業中に随時指示する。

［教科書］

『戦略型経営』ダイヤモンド社
R.E マイルズ 著　C.C スノー　上原守章・内野崇・中野工訳

<97B生対象>

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
経営学部文献講読	13	通期	4単位	本多 毅

[講義概要・学習目標]

経営学部で学ぶ専門分野に関する日本語の文献を読むことをつうじて、「経営学」の勉強が「おもしろい！」「ひとつまじめにやってみよう！」と思ってくれることを期待しています。それぞれの文献が日本や世界の企業社会の「現実」とどのように取り組んでいるのか、筆者の見方や考え方はどうなのか、どのようなアプローチやスタイルで本やペーパーにまとめているのか等々を文献を読むことをつうじて学んでほしいのです。やがて専門ゼミでより深く勉強することになりますが、問題意識を明確にし、各自の研究テーマを発見するように努めてほしいのです。勉強したことを「書いてまとめてみる」「人前で口頭発表してみる」「意見をかわしてみる」ことが皆さんの潜在力を顕在化し、実力を飛躍的に高めることになるでしょう。目標は高いのです。①ものの見方・考え方を学ぶこと　②テーマを発見すること　③書く力・発表する力をつけること　④社会的関心を高めること。

[講義計画]

テキストの章構成に従って進めていく予定。
詳細については、初回の講義時に指示する。

[成績評価の方法]

出席状況、レポート、小テストを含めた
総合評価

[参考文献]

授業時に、適宜指示する。

[教科書]

『企業と戦略』　工藤章著
メディアファクトリー

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
経済原論	01	通期	4単位	大日康史

[講義概要・学習目標]

このクラスは経営学部における経済原論であるので、恐らく経営学部の諸君が受ける最初で最後の一貫した経済学の授業であるという点を重視し、経済学とは何か、経営学とはどう違うのかという点から入り、基礎的ではあるがすでに一般常識として受け入れられているミクロ経済学、あるいはマクロ経済学の理論を講義する。最終的な目標は、日経新聞あるいは経済の専門雑誌、また経済学の啓蒙書程度が読み込める能力を身につけるという点においている。

[講義計画]

全講義回数を２６回として
１回　　ガイダンス
２－７回　　経済学のアウトライン（社会科学における経済学の位置づけ、経営学とはどう違うのか、経済学の思考方法、視点）
８－１３回　　ミクロ経済学の基礎的な理論（消費者行動、企業行動、市場メカニズム）
１４－１７回　マクロ経済変数の用語解説
１８－２３回　マクロ経済学（乗数効果、ＩＳ－ＬＭ分析、ＡＳ－ＡＤ分析）

[成績評価の方法]

評価は毎授業での発言と４－６回のレポート（あるいは抜打ち試験）のみで行う。配点は前者が６０％、後者が４０％である。つまりレポートをすべて出して満点であっても発言がなければ合格しない。逆に発言活発であると１、２回のレポートの出し忘れ、失敗は簡単に挽回できる。不正レポートは一回で不合格とする。出席点はつけないが（出席だけで発言がなければ点数がつかない）、欠席すれば減点する。定期試験は行わない。

[参考文献]

篠原・浅子「入門・日本経済論」有斐閣

[教科書]

ホール＆テーラー「マクロ経済学」多賀出版

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経済原論	02	通期	4単位	森　誠

［講義概要・学習目標］

近代経済学のマクロ経済学を中心に講義します。

まず、日常よく目にする国民所得統計から始めます。この国民所得統計自体は会計上の恒等式を意味します。従って、何が原因で失業が生じているのか、という因果関係が経済理論で検討されます。

この講義では主に標準的なケインズ流のマクロ経済学を学習しますが、必要な限りでミクロ経済学も解説する予定です。

近代経済学では多少の数学が使われていますが、それらについても講義で簡単に解説しますので、前もって数学を知らなくとも理解はできると思います。そして、慣れるために、また、曖昧さを排除するためにほぼ毎回練習問題を解きます。まじめに勉強すれば最初はチンプンカンプンでも1年後にはずいぶん慣れているはずです。

なお、ごく基本的な内容を講義しますので特に教科書は指定しません。市販の教科書はむずかしすぎるかと思います。必要に応じて、参考文献等を参考にして下さい。

［講義計画］

1、GDPと諸概念
2、ISバランス－日米貿易摩擦と貯蓄－
3、古典派の労働市場の考え方
　補論（消費者行動と生産者行動）
4、GDP決定論
5、均衡予算定理
6、IS=LM曲線
9、経済政策による有効需要喚起とその有効性

［成績評価の方法］

年度末試験

［教科書］

［参考文献］

・吉川洋『マクロ経済学』岩波
　ケインズ派の立場によるマクロ経済学
・浜田・安井『マクロ経済学の基礎』有斐閣
　問題形式（命題に対する解説）をとっているのでポイントを押さえる、あるいは、公務員試験対策には向いています。
・瀬岡吉彦『資本主義経済の理論』ミネルヴァ
　新古典派、ケインズ派の問題点の指摘とそれに対する著者の考えが展開されています。通説に疑問を感じたとき見てみるとよいでしょう。ただし難しい本です。

その他、公務員試験等を目指している人は、講義を聴くだけでは十分ではありません。簡単な問題集を入手して各自で解く必要があります。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営管理論	01	通期	4単位	日置　弘一郎
	02	通期	4単位	

［講義概要・学習目標］

この講義では、企業経営における社会システム管理の側面を問題とする。経営管理論はアメリカの企業管理を反映して、企業の意思決定者である取締役（会）の決定についての理論を経営戦略論、その決定の執行者である代表取締役による管理の理論を経営管理論として設定している。ところが、日本の現実の企業では社長が決定と執行の双方を担当している。このために、アメリカの経営管理の理論をそのまま適用したのでは日本の企業の現実に即した理論を構成することはできない。

この講義は、企業の管理を事業管理として考えるアメリカの経営管理論ではなく、社会システムの管理としての側面を強調することによって日本の現実に即した経営管理の理論を作り出すことを試みる。

このために、管理の一般的な理論を追求し、その中で企業管理がどのように行われるかについての理解を与えることを目的とする。社会システムの管理についての理論はこれまで自覚的に構成されているとはいえないが、理論的に、又実践的に管理の体型についての考察を行い、有効な理論を作り出していくことを試みる。既存の経営管理論とは異なる体系を構築するために、ノート講義の形式を取ることになる。できるだけ出席して受講することを要請する。

［講義計画］

次のような項目について講義を進めていく。

○企業の制度→決定と執行の分離
○管理の理論→管理の歴史と管理のハードウェアの歴史
○社会システム論→社会システムの構成とシステム論の基礎概念
　フィードバック・階層システム・サイバネティックスなど
○合理的モデル
○意思決定論→サイモンの一般問題解決法とその放棄。意思決定問題とミンスキーのフレーム概念
○複雑系とポジティヴフィードバックの管理
○人間集団の管理
○社会システム間の連結とその管理
○危機管理
○情報と管理　管理の組織における情報

［成績評価の方法］

試験による。

［教科書］

指定しない。

［参考文献］

既存の経営管理論の体系を再構成していくために教科書は存在しない。ノート講義になるが必要な知識についての参考書はその都度指定する。

昨年度の講義ノートを教官のホーム・ページにアップロードしてあるのでそこにアクセスすることが可能である。利用に関しては情報の倫理に留意すること。ホーム・ページ　アドレス　http/econ.kyoto-u/~hioki

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
商学総論	01 02	通　期 通　期	4単位 4単位	中　田　善　啓

［講義概要・学習目標］

企業が行っている取引を商学の観点から説明する．特に取引制度の進化のメカニズムを明らかにし，ダイナミズムに力点をおきたい．取引活動の目的は市場を形成することによって，企業内，企業間，消費者間の取引の開始から終結までの活動をコントロールして，需要と供給のマッチングを達成することである。具体的にはチャネル，製品，価格，販売促進を中心に企業戦略と関連させて説明する。同時に，これらの戦略はダイナミックに変化していくので，その進化のプロセスが重要である．

［講義計画］

1．　商学とマーケティング
2．　複雑系としてのマーケティング・システム
3．　マーケティングと取引
4．　マーケティング戦略とその進化
5．　マーケティング・チャネルとその進化
6．　製品戦略とその進化
7．　新製品開発戦略とその進化
8．　日本的取引システムとその進化

［成績評価の方法］

期末テストを中心に成績を評価するが，レポートの提出，出席を考慮したい．期末テストは客観テストと論述式のテストからなるであろう．

［教科書］

中田善啓著『マーケティングの進化（仮題）』（1998年春刊行予定）（同文館）
中田善啓著『マーケティング戦略と競争』（同文館）

［参考文献］

田島義博，原田英生『ゼミナール流通入門』（日本経済新聞社）
テドロー『マス・マーケティング史』（ミネルヴァ書房）
授業中のトピックについてその都度参考書，資料を紹介したい．

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営情報論		通期	4単位	佐々木　宏

［講義概要・学習目標］

産業の情報化と情報の産業化が急速に進展しているなかで、各企業はコンピュータをベースにした経営情報システムをどのように構築しているのだろうか。本講座では、情報システムと企業経営との関わりについて、さまざまな視点から学習する。 講義はすべてプロジェクター投影により行う。

［講義計画］
【前期】
①経営情報システムの構造
②経営情報システムの歴史
③情報と意思決定
④意思決定支援システム
【後期】
⑤経営戦略
⑥戦略情報システム
⑦情報技術の動向
⑧経営情報システムの構築手法
⑨トピックス

［成績評価の方法］

前期はレポート。後期は試験。両方とも提出（受験）しないと評価はX。これに平常点を加味して最終評価する。

［教科書］

佐々木宏『経営情報システム』 同文館

［参考文献］

寺本義也『ネットワーク・パワー』ＮＴＴ出版
浅田孝幸『経営情報ネットワークの理論と実際』東京経済情報出版　ほか

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
会計学原理	01 02	通　期 通　期	4単位 4単位	徐龍達（ソ ヨン ダル）

[講義概要・学習目標]

簿記会計が、どのような過程をへて発展してきたか、また、近代的な損益計算の考え方が、どのようにして形成されてきたか、などについて考証しながら、期間損益計算の特徴をやさしく解説することに努めたい。会計理論がこれまで、静態論から動態論へ、さらに資金論として展開されてきたが、これらの考え方を学ぶとともに、今後の会計理論の展望を模索してみたい。

この科目は、簿記Ｉの知識が必要である。簿記Ｉを履修済みか（成績のいかんを問わず）、または、本年度から同時に履修することが要請される。

[講義計画]

〈前期〉① 簿記会計研究の意義
② 財産法的貸借対照表の生成発展
③ 静的貸借対照表論の前半

〈後期〉④ 静的貸借対照表論の後半
⑤ 動的貸借対照表論
⑥ 動的貸借対照表論の批判
（時間が許せば、資金会計論にも言及する。）

[成績評価の方法]

前期末にテストを行い、年度末テストと総合して評価する。テストを受けなかった履修生のレポートは、いっさい受理しない。

[教科書]

徐龍達（著）『ドイツ会計学』改訂増補版、（ＫＢＳ社1997年刊）

[参考文献]

五十嵐邦正『静的貸借対照表論の研究』（森山書店）

安藤英義　『新版商法会計制度論』（白桃書房）

○あとは必要に応じて授業中に指示する。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
財務諸表論		通　期	4 単位	全在紋（チョン ジェ ムン）

[講義概要・学習目標]

〈講義要項〉

企業はその社会的性格のゆえに、自己の財政状態および経営成績を世間に公表する責任をもっている。貸借対照表や損益計算書をはじめとする財務諸表は、そのために作成された、いわば企業の〈証書〉である。企業にとってこわいのは、虚偽の証言が発覚したときに受ける懲罰だけである。だから、ウソがばれないように巧妙に偽証している可能性も大いにある。財務諸表はいったい、どこまでが真実で、どこまでが企業エゴの発露なのか。それを見分ける目を養う。

〈学習目標〉

① 簿記Ｉの学習内容を基礎にして、株式会社の資本会計を理解する。
② 財務会計における慣習・判断の基礎(会計公準・会計原則)を理解する。
③ ３年時以降に履修する経営学部専門科目の基礎となるべき本講義の役割を踏まえつつ、制度会計における損益計算論・貸借対照表論の概要を理解する。

[講義計画]

〈前期〉① オリエンテーション（１回）
② 会計必要論（戦略経営・節税効果等）（１回）
③ 計算書類論（AV使用）（２回）
④ 制度会計論（２回）
⑤ 資本会計論（２回）
⑥ 会計言語論（２回）
⑦ 会計原則論（２回）

〈後期〉⑧ 会計公準論（２回）
⑨ 資産会計論（３回）
⑩ 費用会計論（３回）
⑪ 収益会計論（２回）
⑫ 負債会計論（２回）
⑬ 経営分析論（１回）

[成績評価の方法]

原則として、レポート（前期中１回）と筆記試験（後期学年末１回）との総合点で評価する。なお、日本商工会議所簿記検定試験２級・１級合格者には、別途加点評価する。

[教科書]

青柳文司（著）『現代会計学』（同文舘）

[参考文献]

① 武田隆二（著）『会計学一般教程』（第２版）（中央経済社）
② 飯野利夫（著）『財務会計論』（三訂版）1993年
③ 永野則雄（著）『会計記事がわかる財務諸表論』（白桃書房）

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営学原理		通 期	4単位	谷 口 照 三

［講義概要・学習目標］

経営学の対象である経営は、諸環境との交互作用の中で展開される実践的活動である。 この環境との交互作用の在り方が経営の衰退、成長、発展を具体的に規定する。経営の衰退・成長・発展の過程を原理的、具体的に捉えていくことは、経営学の最も重要な課題である。

本講義では、経営が行為主体的存在であること、および「成長」と「発展」の区別を基本的視座としながら、経営の発展形態を検討することにより、新しい時代の経営学の原理を探求していこうと思う。

受講生は、「成長」と「発展」の違いを良く理解し、現状への批判力と共に将来への洞察力を身につけて欲しい。

［講義計画］

<前期>

Ⅰ．新時代における経営学の課題
　1．経営発展と現代の経営
　2．経営学と経営発展論
Ⅱ．経営発展論のフレームワーク
　1．経営発展論の方法
　2．経営発展の意義とその基礎過程
Ⅲ．事業発展
　1．多角化
　2．M&A
　3．柔軟な専門化と戦略的連帯

<後期>

Ⅳ．企業発展
　1．企業形態の発展
　2．集団化と新しい企業形態の出現
　3．トップ・マネジメント構造の発展
Ⅴ．経営発展
　1．戦略的マーケティング
　2．戦略的研究開発
　3．戦略的プロダクション
　4．戦略的ファイナンス
　5．組織変革とヒューマン・リソーシス
　6．環境志向経営への主体的変革

［成績評価の方法］

前期と後期の試験、および不定期小テスト、リポートの総合評価。

［教科書］

山本安次郎・加藤勝康（編著）『経営発展論』（ 文眞堂 ）

［参考文献］

必要に応じて適宜指示する。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経 営 学 史		通　期	4単位	野 田 俊 範

［講義概要・学習目標］

経営学は、ドイツとアメリカにおいて今世紀初頭に成立した若い学問である。そしてその経営学は、ドイツ、アメリカ、および日本においてめざましい発展を遂げてきたのである。日本における経営学は、ドイツ経営学を骨とし、アメリカ経営学を肉として発展してきたと言われるが、特に学問としての経営学の体系や方法論などの点で、ドイツ経営学によって多大の影響をうけてきたことは事実である。

本講義では、そのドイツ経営学の生成・展開の歴史を概観し、主要な理論傾向について概説するするとともに、今後の発展の方向について考えることとしたい。その際、学説と歴史的・社会的背景との関連を明らかにすることを重視する。いかなる学説も、それの社会的・経済的・文化的背景による制約から逃れることはできないからである。

［講義計画］

Ⅰ．経営学史研究の方法
Ⅱ．ドイツ経営学の歴史
　1.私経済学の成立
　2.私経済学から経営経済学へ
　3.経営経済学の展開
　4.社会的市場経済と経営経済学
　5.共同決定と経営経済学
　6.批判的経営学の系譜
Ⅲ．現代のドイツ経営学

［成績評価の方法］

学年末試験により評価する。

［教科書］

使用しない。

［参考文献］

大橋昭一編著『現代のドイツ経営学』税務経理協会　1991年。
海道ノブチカ／深山明編著『ドイツ経営学の基調』中央経済社　1994年。
その他、必要に応じて適宜指示する。

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
経営史		通期	4単位	矢倉 伸太郎

[講義概要・学習目標]

業と史授
企主歴
別，，で
個をら
の程か
の過面ま
つく側い
くいのな
いて程行
るし過て
け展定。つ
お発決すよ
にが志まに
業業意き述
産企のい口すな内容で行います。
器の者てとで
機ら営し冑欠同様
気れ経察板可き
電そや考は不続き
，，動に業が
〈のげ活的授席〉引
期国上産証，出期に
前がり生実おの後期
〈わ取て・なへく前
をし的業

[講義計画]

者によ業な諸な一にげ発
営的の企来営分の的上の
経証次た出経自め証り業。
・実，しがの，た実取企す
務的は述と来て つ的。をらで
財史て上ご将い持史す業れ定
・歴し，くのつ。を歴ま企そ予
売，ともい業にん方をり別，く
販を由来て企事せえ動あ個てい
・動理将し，たま考活でのして
務活るに活てっりや諸新国通し
労諸す様生いいな方営知がを察
・営強同，おとば見経故わ動考
産経勉。とににかねのの温の活に
生たをす在係在のたり去りか諸的
のつ史ま現関現る持な過まつ営証
業い。営れは無はなを分のつく経実
企とす経ら達は達に方自業・いの的
，程でがえ私と私うえの企す，業史
は過の達考，動。，よ考こ，では企歴
と定も私がち活うえのや，てのでら，
史決る，とわ諸ょゆど方てしる義れを
営思すてこな営しれが見しとす講そ程
経意究さなす経でそ動のそ段究本，過
の研うのい活り手研て展

査して
調価
席評
提出に
をう的
な合
行総
にて
期し
定味
不加
に，レポート
ため
る，を
にと
点価
評評
深の
験ト
解試一
理。期ポ
のす定レ
容まの，
内き末と
業だ期果
授た後結
い のま

[成績評価の方法]

必要があれば紹介します。

[参考文献]

使用しません。

[教科書]

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
欧米経営史		通期	4単位	次田 健作

[講義概要・学習目標]

現代社会において、企業や会社はかつてなく大きな存在となっている。それは、私たちの多くが働く現場でもあるが、一方でその活動が私たちの生活や暮しに及ぼす影響力は、直接・間接を問わず測りしれないものになっている。その意味で企業のあり方は、今後の社会への展望を大きく左右する要因の一つであることに間違いはない。

こうした現代の経済社会における企業のあり方や行動様式を理解するためには、これを、発生から発展・拡大していくその変化の歴史的経過のなかで考察する視点をもつことが必要であろう。

この講義では、主に欧米にその題材をとりながら、工業化・近代化という大きな経済史の流れを背景にした企業経営の歴史的展開を、具体的ないくつかのテーマを通して考えていきたい。

[講義計画]

経営史を学ぶにあたって、経営史に隣接する経済史や企業者史などとの関連など、その方法論的課題について考察することからはじめ、次に、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、そして日本など各国の経済史的背景と経営風土の形成、あるいはそれぞれの国における企業者の形成について検討する。そのなかで、とくに制度の発展については、株式会社制度を、生産方式についてはテイラーシステムの展開を、現代社会への関心の視点からとりあげることにしたい。時間が許せば、各国の代表的な個別企業の歴史についても、言及したい。

[成績評価の方法]

学年末のレポート提出による。

[参考文献]

- 山下幸夫編著『経営史―欧米』，1977年（日本評論社）
- 米川伸一編『経営史』，1977年（有斐閣）
- 鈴木良隆・安部悦生・米倉誠一郎『経営史』，1987年（有斐閣）
- 土屋守章編『経営史―西洋と日本―』，1994年（有斐閣）
- 渡辺尚・作道潤『現代ヨーロッパ経営史』，1996年（有斐閣）
- 原輝史編『フランス経営史』，1980年（有斐閣）

[教科書]

特に指定しない。授業中に紹介する図書及び左記参考文献を必要に応じて参照して下さい。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
企業論		通期	4単位	稲別正晴

［講義概要・学習目標］

企業は経済活動の単位であり生産や流通活動を通じて資源の配分を行っている。具体的にはそれらは生産数量や価格あるいは投資などの経済的諸決定としてしてあらわれる。

また、今日の典型的企業は法人の形態をとっており、特にその典型である株式会社では株式所有の分散と経営の分離がみられる。この場合経営者と株主、その他の利害関係者との関係が重要な問題となる。

さらに、典型的株式会社は組織体であり、そこでは企業規模、組織形態あるいは組織内の権限と責任のあり方が問題となる。

本講義では市場経済における企業を対象とするのであるが、今日の典型的企業はうえにのべたように多面的にとらえねばならない。したがって、企業の経済決定、株主、経営者、利害関係者の関係、企業組織等について理解することが必要である。

なお、本講義は日本の企業システムとの関連性の中で進める予定である。日本の企業システムは現在急速な環境変化の中でその変革を迫られている。例えば、会社は誰のものか、といういわゆる「コーポレイト・ガバナンス」の問題は、今日日本企業のあり方が問われている中で一つの大きな課題である。したがって、受講生諸君が講義を通じて日本企業のあり方について自ら探求することを期待している。

［講義計画］

講義は大きく二部に分かれる。

「第一部」

1．企業の役割と企業目的
2．需要の理論
3．生産と費用の理論
4．価格、産出量の決定
5．企業の成長と投資

「第二部」

6．「経営者企業」の成立
7．経営者企業の行動仮説
8．取引費用の経済学
9．プリンシパル＝エージェントの理論
10．日本の企業システム
11．日本企業の海外進出

［成績評価の方法］

前期と後期の試験ならびにリポートによる

［教科書］

稲別正晴著『企業の基礎理論』　法律文化社

［参考文献］

教科書に記載

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営財務論		通　期	4 単位	今　木　秀　和

［講義概要・学習目標］

企業は、その活動のためにさまざまな経営資源を必要としていますが、この講義ではそのうちの「カネ」という側面の管理をとりあげます。問題領域的には資本の調達、資本の運用、利益処分の問題を「管理」の観点から講述することになります。収益性と流動性という目標を達成するための資本管理、資金管理がその内容であるということもできます。またグローバル化という今日的課題に伴う財務問題をもとりあげる予定です。

講述を中心にすすめますが、基礎知識と分析技法をしっかりと修得するためときどき問題にとり組んでもらうつもりです。

〈学習目標〉

① 資本管理と資金管理の基礎知識と分析技法をしっかりと修得すること
② 環境変化によって生起している財務分野の新しい課題を理解し、それらへの関心と意欲を誘発すること

［講義計画］

〈前期〉財務管理の基礎
　財務計画
　財務分析
　資本調達と金融制度
　資本調達形態

〈後期〉投資決定
　資本コストと資本構成
　運転資本管理
　配当政策
　資本市場の理論
　国際企業財務

［成績評価の方法］

成績は前期と学年末テストによってつけます。
授業中に行なう練習問題やレポートの提出を成績評価の加点要素とします。
（学年末テストは制度上のテストであるので、必ず受験すること。）

［教科書］

赤石雅弘・榊原茂樹　他（編）『財務管理』（有斐閣）

［参考文献］

村松司叙（著）『財務管理入門－増補版－』（同文舘）
岡部政明（著）『企業財務論』（新世社）
杉井弘和（編著）『企業財務論』（税務経理協会）
後藤幸男・田渕　進（編著）『新経営財務論講義』（中央経済社）

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
経営労務論		通期	4単位	面地 豊

[講義概要・学習目標]

経営労務論は、究極的には経営における「労働」をめぐる論である。「労働」をめぐる論は、労働をおこなう人間＝労働者の側からの論と、労働を利用する経営の側からの論に2分することができる。

講義は両者の側からの論を通じて、経営労務の内容を明らかにしていく。

[講義計画]

前期は、経営の側からの「労務」に関する諸問題あるいは諸理論を中心に、今後期は、「労務」に関する労働者の側からの論、―これは労働問題の論の性格をもつ―を中心に講義を展開する。

[成績評価の方法]

期末試験による。(レポートを参考にするかもしれない)

[参考文献]

その都度指示する。

[教科書]

面地豊『経営社会学の生成』千倉書房(5月出版予定)

赤岡功他著『経営労務』有斐閣

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
生産管理論		通期	4単位	鬼塚光政

[講義概要・学習目標]

＜講義概要＞

産業革命期の英・仏国に芽生え、１９世紀末から米国で本格的に展開し、１９７０年代以降日本で新たに展開した「近代的生産管理」の生成・発展の過程を経済的、社会的、技術的等の背景を踏まえて段階的に跡づけ、各段階の代表的な生産管理の特徴、並びに意義と限界を講述する。この場合はじめに資本制企業における生産管理の基本的性格、およびその分析の視点とそのための基礎概念を明確にする。

＜学習目標＞

(1) 生産管理の基本的性格と分析視角
(2) 生産管理システムの分析に必要な基礎概念
(3) 各段階の代表的生産管理方式の形成条件、内容的特徴並びに意義と限界
(4) ＩＥ，ＳＱＣ，ＯＲ，ＶＥ，ＳＥ等の経営科学的手法の生産管理への適用
(5) 生産管理の実践と社会・自然との関係

[講義計画]

＜前期＞ 1.オリエンテーション(1回)
2.生産管理の基本的性格と分析視角(5回)
3.中間試験(1回)
4.生産管理前史(3回)
①生産管理の萌芽　②初期大量生産の成立

＜後期＞ 5.生産管理の成立(4回)
課業管理の成立と展開
6.生産管理の発展(4回)
本格的大量生産方式の展開
－同時管理・システム管理
7.多種多量生産型システム管理の展開
－ＪＩＴ，ＦＡ・ＣＩＭ
8.国際化段階の生産管理
－「日本的生産システム」の海外移転

[成績評価の方法]

前・後期末各１回の試験の成績に出席状況、レポート提出状況等を加味する。

[参考文献]

太田雅晴、『生産情報システム』、日科技連
国狭武己、『現代生産システム論』、泉文堂
田村孝文、『ＣＩＭ入門』、日本能率協会
門田安弘、『新トヨタシステム』、講談社
藤本隆宏、『生産システムの進化論』、有斐閣

[教科書]

追って指示する。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
マーケティング論		通　期	4 単位	鈴　木　幾多郎

[講義概要・学習目標]

現在の経営の中心課題は、絶えず変化する市場環境への適応を求めることによって、企業の存続と成長を維持していくことである。この市場との直接的な接点をもつ活動がマーケティングである。この講義では、市場構造の変化と戦略的マーケティングを中心に具体的なケースを取り上げながら、マーケティングの考え方の理解を目指すものである。

[講義計画]

以下の内容で講義を行う。

1）マーケティングの役割と課題

2）マーケティング戦略と戦略的マーケティング

3）市場構造の変化と戦略的マーケティング

4）日本企業のマーケティング戦略

5）マーケティングの新しい方向

[成績評価の方法]

レポート、試験の結果などで評価する。

[教科書]

「新版マーケティング」嶋口充輝・石井淳蔵著、友斐閣

[参考文献]

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
流通論 （旧流通経済論）		前期集中	4単位	岸　本　裕　一

[講義概要・学習目標]

流通経済論は、生産と消費との間の懸隔を架橋する経済活動である流通を研究対象として、これを国民経済的視点から研究を行うものである。この研究は、大別すれば、理論的研究と規範的研究とに分類される。理論的研究は、流通を説明し、予測する法則ないし理論の発見を目的として行われるものであるが、この研究には、膨大な実証的研究の蓄積が必要とされる。規範的研究は、流通効率をあげ、望ましい流通を実現するためにはどうすべきかの方策を考察し、その指針を作成することを目的としている。このような流通経済論の方法上の裏付けとして用いるのは、システム論、計量経済学の諸手法（構造パラメータの計測、モデル、シミュレーション分析など）及び行動科学の諸手法（購買生起モデル、セマンティク・ディファレンシャル法など）等の分析である。この講義では、これらの分析手法や、それによる分析成果をわかりやすく説明しながら、流通システムの構造や現在の問題点などを説いていく予定である。

[講義計画]

0．世界経済のトレンドと流通
1．流通経済の範囲と対象
2．流通経済の分析理論と分析手法
3．流通経済研究の歴史
4．流通をめぐる環境変化と流通へのインパクト
　1）インターネット　　3）グローバル化
　2）規制緩和　　4）法改正

5．小売流通をめぐる諸問題
6．卸売流通をめぐる諸問題
7．市場調査の方法と実際
8．サービス流通（やすらぎ産業）の現状
9．今後の流通経済の展望
　－地域経済と世界経済－

[成績評価の方法]

定期試験，と平常点との総合評価により実行する。

[教科書]

岸本裕一・田中達秀著『タイアップソング・マーケティング』同文舘，1998年，
岸本裕一編著『農業流通システム論』映学社，1998年。

[参考文献]

Kishimoto, Y., 『Japanese Agricultural Marketing Systems』, St. Andrews University Monograph Series, 1998.
（イタリック体で）

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
銀行論		通期	4単位	津田　和夫

［講義概要・学習目標］

銀行に関する数多くの問題を、戦後の歴史を振り返りながら様々な視角から研究し、現代の金融ビッグバンの理解を深める。

研究対象は銀行の基本機能、金融システムの戦後史、金融政策、証券業との関係、公的金融との関係、等が基本になるが、膨大な不良債権、低金利政策の是非、大蔵省による保護行政の破綻、預金者保護等、国民生活に重大な影響がある課題も集中的に採り上げる。

改正日銀法が施行され金融業生が衣替えし、外国為替管理法が改正（原則的な規制撤廃）され我々一般国民でも外貨取引が自由になり、また銀行による投資信託の販売が既に開始され証券会社との垣根が低くなり、さらに金融持株会社の実現も見通せる段階に入った。

このように改革はかなりの早さで、かつ深く進行し、国民生活に大きく影響するので、時事問題も随時採り上げる。

［講義計画］

＜前期＞ 教科書１章から３章まで

＜後期＞ 教科書４章から６章まで

［成績評価の方法］

期末試験、出席状況、中間レポート（随時実施）

［教科書］

津田　和夫（著）「現代銀行論入門」（経済法令研究会）

［参考文献］

津田和夫（著）「巨大銀行の構造」（講談社・現代親書）
日本銀行・金融経済研究所（編）「我が国の金融制度」（日本信用調査）
鈴木淑夫・岡部光明（著）「実践ゼミナール日本の金融」（東洋経済新報社）

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
証券論		通　期	4 単位	岡　崎　守　男

［講義概要・学習目標］

証券論で取り扱う証券は株式会社の発行する株式、社債、それに国の発行する公債などを総称した資本証券である。この講義では、現代の経済のなかで重要な役割を果たしているこれらの資本証券の発行と流通のもつ意味、それを支える証券市場の諸制度、証券の流通に伴う価格形成、株式所有とそれをとおしての支配の問題などについて、なるべく具体的な事実を紹介しながら勉強する。

［講義計画］

〈前期〉① 証券論の対象としての有価証券
② 株式会社における株主の諸権利＝株式、株式の種類、株式会社制度の特徴
③ 債券＝公社債（概念、社類）
④ 証券業務（発行・流通）

〈後期〉⑤ 証券市場（発行市場、流通市場）＝証券取引所、証券会社、信用取引、先物取引、投資信託
⑥ 証券の価格形成（株式、債券）、擬制資本、価格指標
⑦ 株式の所有と支配

［成績評価の方法］

期末試験によって行う。原則として出席はとらないが、授業中に不定期に小テストを行うこともある。

［教科書］

大蔵省証券局（編）『図説　日本の証券市場』（財経詳報社）

［参考文献］

川合一郎（著）『著作集第３巻「株式価格形成の理論」』（有斐閣）

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
保険論		通期	4単位	武田久義

[講義概要・学習目標]

保険は、リスク処理の一手段である。したがって保険は、広範なリスク・マネジメントとの関連において理解されなければならない。そこで、リスクの分析が第一になされる必要がある。しかし現在の社会では、保険がリスク・マネジメントの中心的位置をなしている。現実には、保険とその制度の講義に重点がおかれることになる。

[講義計画]

＊講義計画

前期

リスクとリスク・マネジメントについて。保険の意義と役割。保険の組織と保険制度。保険と保障。

後期

代表的な保険についての解説。保険の歴史と将来の保障。リスク、保険と社会、文化。

[成績評価の方法]

期末テスト

[教科書]

プリントを配付する。

[参考文献]

① 武田久義外、『講案保険総論』、法律文化社
② 前川寛、『現代保険論入門』、中央経済社

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
国際経営論		後期集中	4単位	網野俊賢

[講義概要・学習目標]

経営学が対象とする経営、なかでも企業の経営はいろいろな意味で急速に多様化しています。　その中でも企業の国際化は著しく、その側面を見ないで企業の経営を理解することは極めて困難となって来ました。　さらに企業の国際化は単に大企業に止まらず、多くの中小企業をも巻き込む幅の広い動きとして見る必要があります。　経営学を学ぶ者として国際経営の研究は必須項目と言えるでしょう。

本講義では国際化を進める日本の大小さまざまな多国籍企業の行動に焦点を当てて、こうした企業の国際戦略を知ると共に、マーケティング、海外生産、研究開発といった領域での具体的な行動を学ぶことによって国際経営が意味するものを理解しようとします。

また企業の国際展開は世界各地で文化的な背景を異にする人達が同じ職場で働くという、いわゆる異文化経営を生み出します。　いくら本社で立派な戦略を立てても、現地での異文化経営が正しく行わらなければ戦略の達成は出来ません。　その意味で多国籍企業の異文化経営の良否は企業の将来を左右しかねないものと言えます。　従って講義の中では異文化経営に関する勉強にもかなりの時間を割くようにします。

本講義では講師自身の長年におよぶ多国籍企業での経営経験を活用し、国際経営に於いて生じる具体的な事例をケース・スタディの形で多く取り上げ皆さんの興味を高め、国際経営への理解をより一層深めるように工夫したいと思います。

（本講義の異文化経営に関する部分は、平成9年度後期に開講された「経営・商学特別講義－北米における異文化経営」と重複するところもありますが、新しいケース・スタディなどを紹介することによって、再度受講する人にも興味が持てるものとするつもりです。）

[講義計画]

この講義で取り上げる主な項目

（1）多国籍企業とは
（2）多国籍企業の国際経営戦略
（3）国際マーケティング
（4）海外生産
（5）海外研究開発
（6）グローバル経営とは
（7）異文化経営（異文化の理解、コミュニケーション、社会慣習や法律など）

（注）後期集中講義の為、一日の授業が2時限分となりますが、最初の90分は主に多国籍企業の国際展開に、後半の90分は異文化経営に焦点を当てることによってバラエティに富む授業展開を図りたいと考えています。

[成績評価の方法]

（1）出席を重視し期末最終成績の判定に加算します。
（2）期中に数回の小テストを行います。
（3）期末に筆記試験を行います。

[教科書]

（1）吉原英樹著「国際経営」　有斐閣刊　ISBN4-641-12036-6
（2）講師作成のプリント

[参考文献]

（1）吉原英樹著「日本企業の国際経営」　同文舘刊　ISBN4-495-35381-0
（2）稲別正晴・全在紋編著「環太平洋圏企業経営への提言」　同文館刊　ISBN4-495-35941-X
（3）安室憲一著「国際経営」　日経文庫　ISBN4-532-10535-8

《インテグレーション科目》

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担当チーフ
経営・商学特講（企業家精神と企業経営）		前　期	2単位	今木秀和

[講義概要・学習目標]

日本の経済も企業も転換期を迎えています。戦後50年以上が経過しましたが、戦後のあの混乱期のなかで今日大企業にまで育っている幾多の企業が誕生しています。今や再び果敢に企業を興す精神と実行力が、この転換期において求められています。そして幸いなことに、企業を起こす精神にあふれた幾多の桃山学院大学卒業の先輩がよき手本を示してくれております。この講義は本学の先輩の実践的な体験談をつうじて、起業することのむずかしさやおもしろさ、企業を経営するとはどういうことなのかといったことを生の情報として伝えることにねらいがあります。さまざまな業界でりっぱに起業家として成果をあげておられる講師陣が、「秘伝」を伝授してくれます。

各講義の内容は①各種業界の実状、②企業家精神と実績、③企業経営の実状から成り立っています。

[講義計画]

本年度分は未定。参考までに１９９７年度の講義スケジュールを紹介しておく。

今木秀和　「この講義のイントロダクション」
松下晴彦氏　「ビルゲイツの一人勝ち」
中造純二氏　「家業の継承と革新」
川崎　治氏　「中国への企業進出」
倉橋　勝氏　「グローバル社会とキャリアストラテジー（１）（２）」
勝　亘氏　「シンガポール・中国在住３０年。海外でいかに成功するか。」
吉野　茂氏　「ロイヤルホテルをとおしてみるホテル業」
繁田寛昭氏　「外資系製薬企業の経営課題」
若村哲司氏　「テント業界の現状」
藤原達治郎氏「スポーツクラブ経営に学ぶ」
中島郁英氏　「感謝と目標意識をもつ経営」
今木秀和　「この講座のまとめ」

[成績評価の方法]

レポートを提出してもらう。出席を重視し、毎回講義の要約をその時間中に提出してもらう。以上を総合的に評価する。

[教科書]

使用しない

[参考文献]

追って指示する。

《インテグレーション科目》

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担当チーフ
経営・商学特講（ホンダの米国現地経営）		通　期	4単位	鬼塚光政

[講義概要・学習目標]

本田技研工業（株）は、日本の自動車メーカーとしては最初に北米での現地生産に乗り出し、当初から華々しい成功を収め、今では自動車生産の全部面－開発・設計、生産技術、製造および販売－を現地化している。現地生産のホンダ車は日本製ホンダ車と変わらないパフォーマンスを発揮して北米市場で揺るぎない地位を築きつつあるばかりか、日本を含むアジア、ヨーロッパ等その販路は世界大に広がっている。それに伴い北米は日本と並ぶホンダの一大戦略拠点になるのみならず、現地の雇用改善、地域社会の活性化、国際収支の改善等に寄与できる「アメリカの会社」として認知されつつある。

この講義はホンダの北米製造拠点であるＨＡＭ(Honda of America Manufacturing, Inc.)社の経営の実際を専門的立場から総合的に捉え、同社は経営の各部面で現地の企業社会や地域社会でどのような問題に直面しつつあるか、「日本的経営」を文化の異なる現地に移転できるのか否か、移転できるとしたらどの様な形でできるのか、またどのように経営業績を上げつつあるか等々の観点から考察する。講師陣は本学総合研究所の研究プロジェクトとして実施された「ＨＡＭの総合的研究」(1994年4月~1998年3月）のメンバーとホンダ側協力者である。

[講義計画]

オリエンテーション	本学教授	鬼塚光政
経営戦略	本学教授・学長	稲別正晴
部品調達	本学教授	今木秀和
人事・労務	明治大教授	黒田兼一
	異文化経営研究所所長	網野俊賢
生産管理	本学教授	鬼塚光政
北米市場戦略	本学教授	鈴木幾多郎
地域社会関係	本学教授	谷口照三
異文化コミュニケーション	異文化経営研究所所長	網野俊賢
財務指標	本学教授	全在敏
現地駐在員の税務問題	本学教授	中田信正
	異文化経営研究所所長	網野俊賢

[成績評価の方法]

出席状況、発言状況およびレポート内容を総合的に勘案して評価する。
レポートの提出は前・後期各１回の予定。

[教科書]

稲別正晴編著、『ホンダの米国現地経営』、文真堂、１９９８年５月刊行予定、価格未定

[参考文献]

追って指示する。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論Ａ	０１ ０２	後　期 後　期	２単位 ２単位	家　本　修

［講義概要・学習目標］

この科目は、コンピュータを利用するための基本的な技術を習得する事を目的とした科目です。コンピュータを使った情報の収集、分析、発信といった様々な操作技術を習得し、高度情報化社会での適応力を養成するものです。特に、電子メールや情報の収集や分析の技術は、必ず必要となる技術であり、情報発信も当然必要とするものです。そこで、パソコンの基本的な使い方から始まり、情報収集からプレゼン技術に至るまでの基本的なコンピュータ技術をできるだけ優しく、取得していただくことを目標とします。

［講義計画］

１．基本的なＰＣの使い方
２．ワープロの技術
３．Ｅ－ＭＡＩＬの使い方とマナー
４．エクセルの基本
５．ワープロ（企画書を作る）
６．ワープロ（調査用紙とワーディング）
７．ワープロ（表現技術）
９．エクセル（データ入力と集計）
８．グラフとデータ表現技術
１０．ピボットテーブル：クロス
１１．レポーティングとＤＴＰＲ、パワーポイントの基本
１２．パワーポイントと表現技術

［成績評価の方法］

出席を重視します。総合評価は、最終レポートとそのプレゼンをベースに出席、途中課題、授業参加意欲を加味し評価します。

［教科書］

必要に応じて、プリントを配布しますが、ヘルプ、プリントや各自で調べて内容やコピーをノートとして、最終的には各自それぞれの最も適した教科書を作成していただきます。

［参考文献］

必要に応じてプリントを配布します。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論Ａ	０３ ０４ １６	後　期 後　期 後　期	２単位 ２単位 ２単位	稲　村　昌　南

［講義概要・学習目標］

パソコンに関する基礎的知識の復習とワープロ（Word）、

表計算（Excel）の基本的な操作を修得することにより

簡単なレポート作成を目指す。

［講義計画］

パソコンの基礎の復習

ワープロ(Word)の基礎的操作

表計算(Excel)の基礎的操作

ワープロと表計算を用いてのレポート作成

［成績評価の方法］

出席、レポート、試験の総合評価

［教科書］

Microsoft Word　セミナーテキスト初級編

Microsoft Excel　セミナーテキスト初級編

［参考文献］

「できる　Word 」インプレス

「できる　Excel」インプレス

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論A	05 06	後　期 後　期	2単位 2単位	植　木　泰　博

［講義概要・学習目標］
1．講義概要
ソフトウェア概要：基本ソフトウェアの概要、コンピュータ上での
ソフトウェア実行の仕組みなど
コンピュータ上でのソフトウェアの実際：ＢＡＳＩＣ言語を用いた
プログラミングを中心に処理の考え方、処理の方法
グラフィックなどの解説
2．学習目標
①プログラミングの記述、命令の解説。
②グラフィック作成で絵を書く処理を通して、プログラミングの作成方法を理解する。
③実習で目的（要求）と実現方法、プログラム開発の一連の作業を行う。

［講義計画］
<後期>
1．ソフトウェアの概略
ソフトウェア実行の仕組み、利用アプリケーションの説明
2．ＢＡＳＩＣ言語
文法、書式解説、例題による命令の理解
グラフィック、グラフィック命令
実習
最終レポート（操作説明書作成）

［成績評価の方法］
コンピュータを利用した実習が中心
1．出席　2．レポート提出（宿題）　3．最終レポート提出

［教科書］
プリント配布

［参考文献］
「Ｎ８８－日本語ＢＡＳＩＣリファレンスマニュアル」（日本電気）

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論Ａ	07 08	後　期 後　期	2単位 2単位	後　藤　敦　史

［講義概要・学習目標］

これまでコンピュータは計算機と呼ばれるように、「そろばん」として使われてきた。例えば、帳簿計算や科学技術計算などには古くからコンピュータが使われてきた。これらの計算は、それぞれの場合において問題解決の一過程になっている。コンピュータによる結果をもとに我々は考え、更なる問題解決を行う。つまり、コンピュータは「知的生産」の道具なのである。
我々は問題を解決する場合、その問題を分析し、解決するための手段を考え、それを実行している。この「解決するための手順」がアルゴリズムである。そして、アルゴリズムをプログラミング言語に変換することがプログラミングである。つまり、コンピュータによる処理とはプログラミング言語に変換されたアルゴリズムを実行することである。
本講義では、パソコンの概要とプログラミングというものを理解し、プログラミング言語BASICを例にとりながら、プログラミングの基礎と問題解決の手順や考え方を勉強する。

［講義計画］

コンピュータの基礎知識
プログラミングの基礎知識
　プログラミング言語、フローチャート、プログラムの構造
プログラミング基礎演習
　BASIC言語による簡単な数値計算、グラフィック処理
プログラミング実践演習
　簡単なシステムの構築

以上のテーマについて数時間ずつの講義・実習を行う。

［成績評価の方法］

講義時の課題、レポート、出席により評価する。

［参考文献］

桃山学院大学計算機センター（編）
『桃山学院大学計算機センターユーザーズガイド』

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論A	09 10	後　期 後　期	2単位 2単位	寺　川　佳代子

[講義概要・学習目標]

前期にプログラミング論Ｂを取得済みで円滑なキーボード操作ができ、簡単なワープロソフト、表計算ソフトの操作のできる学生を対象に講義を行なう。
使用言語はＢＡＳＩＣであるが、他言語にも応用できるよう、アルゴリズムの基礎（順次、分岐、反復）の理解も学習目標の１つとする。

[講義計画]

・パソコンの概要、ＯＳの概要についての学習
・フローチャートの基礎
・ＢＡＳＩＣの文法、基本命令
・グラフィックス

[成績評価の方法]

出席率
課題提出
実技テスト

[教科書]

追って指示する

[参考文献]

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論A	11 12	後　期 後　期	2単位 2単位	西岡　茂樹

[講義概要・学習目標]

プログラミング論Ｂ（前期）において、ＰＣの基礎およびＰＣによる情報活用の基礎を修得した諸君が、次のステップとして学ぶ科目がプログラミング論Ａである。
コンピュータは、人間がすべての動作手順を指示することにより、はじめて機能する機械である。その動作手順を作成することを「プログラミング」と呼ぶ。
プログラミング論Ａにおいては、Ｗｉｎｄｏｗｓ時代の新しい言語である「Ｖｉｓｕａｌ　Ｂａｓｉｃ」言語を用いて、プログラミングの基礎を修得することを目標とする。
なお、講義は、ＰＣの演習が中心となるため、１回でも欠席すると以降の講義が理解できなくなる。皆出席する覚悟をもって受講すること。
また、原則として、西岡講師によるプログラミング論Ｂを、前期に受講していること。

[講義計画]

①Ｖｉｓｕａｌ　Ｂａｓｉｃの環境
②アルゴリズムの基礎１　～順次処理～
③アルゴリズムの基礎２　～判断分岐～
④アルゴリズムの基礎３　～繰り返し～
⑤オブジェクトの基礎１　～コマンドボタン～
⑥オブジェクトの基礎２　～ラベル／テキストボックス～
⑦オブジェクトの基礎３　～イメージ／ピクチャー～
⑧オブジェクトの基礎４　～タイマー～
⑨プロジェクトの管理とデバッグ

[成績評価の方法]

出席率、課題の提出率、試験の成績、受講態度などを総合的に評価して判定する。

[教科書]

開講時に指定する。

[参考文献]

その都度、提示する。

科　　目　　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論A	13	後　期	2単位	牧野　丹奈子

［講義概要・学習目標］

この講義では，パソコンを利用しながらＢＡＳＩＣを学習する。ＢＡＳＩＣの基本文型を学習しながら，初歩的な問題から応用問題へと進めていく。
この講義の目標として，パソコンの利用技術やＢＡＳＩＣの基礎知識の修得があげられるが，最も重要な目標は“プログラムの考え方”の修得である。つまり，あたえられた問題をいかにしてプログラムに変換するのか，を考えることである。出席を重視する。
本講義の目標は，１．パソコンに慣れる，２．プログラム的思考に慣れる，３．ＢＡＳＩＣの基本を修得する，の３点である。

［講義計画］

1．コンピュータの基礎知識（復習）
2．ソフトウエアの種類
3．基本的なプログラム（四則演算，INPUT文，IF　THEN文，FOR　NEXT文など）
4．フローチャートの書き方
5．やや高度なプログラム（ 最大値・最小値を求める，昇順にならべる，図形問題，グラフ作成など）

［成績評価の方法］

出席，課題，試験の総合評価に対して絶対評価をおこなう

［教科書］

プリントを配布する

［参考文献］

科　　目　　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論A	14 15	前　期 後　期	2単位 2単位	竹　内　昭　浩

［講義概要・学習目標］

コンピュータに何らかの作業をさせるためには、プログラムを作成せねばならない。プログラムとは、コンピュータに何をどのように実行させるかの手順を記述したものである。
本講義では、ＢＡＳＩＣと呼ばれるプログラミング言語を用いて、プログラム作成の基礎を学習することを目的としている。

［講義計画］

1．四則演算
2．簡単な図形処理
3．条件の判定
4．繰り返しの処理
5．ファイルの操作

［成績評価の方法］

試験の結果に、提出してもらうレポートを加味して評価する。

［教科書］

特に指定しない。

［参考文献］

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論B	01 02	前　期 前　期	2単位 2単位	家　本　修

［講義概要・学習目標］

この科目では、様々なアルゴリズムの学習し、プログラム化していく技術を習得することを目的とします。アルゴリズムの表現手段としてはフローチャート等であり、プログラムとしてはＶＢを用いますが、初心者でも分かるように進めていきます。特に問題を把握し、分析し、解決方法を明らかにしていく手法については、発想法を交えながら進めていきます。

プログラム化していく過程についての技術と表現の技術についてもＶＢを使って修得できることを目的とします。

［講義計画］

１．電子ＭＡＩＬの使い方とワードについて
２．フローチャートについて
３．発想技術と課題
４．ＶＢの基本
５．問題把握過程と把握技術
６．解決過程と解決技術・表現技術
７．プログラムの構造と表記
８．イメージとピクチャーでの表現
９．ドキュメント技術と表現法
１０．スケージュール管理とグループウエア
１１．総合課題

［成績評価の方法］

出席を重視します。総合評価は、最終レポートとそのプレゼンをベースに出席、途中課題、授業参加意欲を加味し評価します。

［教科書］

必要に応じて、プリントを配布しますが、ヘルプ、プリントや各自で調べて内容やコピーをノートとして、最終的には各自それぞれの最も適した教科書を作成していただきます。

［参考文献］

必要に応じてプリントを配布します。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論B	03 04 16	前　期 前　期 前　期	2単位 2単位 2単位	稲　村　昌　南

［講義概要・学習目標］

ＯＳやキーボード操作などパソコンに関する基礎的な知識の修得と

VISUAL BASICを用いた初歩的なプログラミングによるALGORITHMの

修得を目指す。

［講義計画］

パソコン概要（キーボード操作など）

ＯＳの概要

VISUAL BASICによる基礎的なプログラミング

［成績評価の方法］

出席、レポート、試験の総合評価

［教科書］

開講時に指定する。

［参考文献］

特に指定しない。（適宜、市販の入門書等を参照すること）

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論B	05 06	前　期 前　期	2単位 2単位	植　木　泰　博

［講義概要・学習目標］

1．講義概要

コンピュータの概要：こんぴゅーたの仕組み、各部の名称と役割、キーボード操作の解説と練習。

Ｗｉｎｄｏｗｓを利用したマルチメディア文章の作成。

コンピュータの利用：アプリケーションソフトウェアの利用（ワープロ、表計算）と表現方法（情報加工方法）の習得、電子メールと図書館書籍検索システム利用方法解説。インターネットの利用。

2．学習目標

一般的なコンピュータ用語の理解と操作方法の理解。

目的の情報を文書化し、データの表現方法の理解。

コンピュータを自分の表現ツールとして利用できるマルチメディア文章の作成を可能にする。

［講義計画］

<前期>

1．コンピュータの概要
　コンピュータの仕組み
　各部の名称と役割
　キーボード操作の解説と練習、ＯＳの仕組み
2．ワープロ(Word)操作方法解説
　文書入力編集、罫線など
3．表計算(Excel)
　データ入力編集、グラフ
4．マルチメディア文書の作成
　Ｗｉｎｄｏｗｓ間のワープロを利用した表計算のグラフの貼り付け
　インターネット上のデータの利用
5．電子メール、図書検索システムの利用方法解説
6．最終レポート作成

［成績評価の方法］

コンピュータを利用した実習が中心

1．出席　2．レポート提出（宿題）　3．最終レポート提出

［教科書］

プリント配布

［参考文献］

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論B	07 08	前　期 前　期	2単位 2単位	後　藤　敦　史

［講義概要・学習目標］

情報化社会の発展により、我々の日常生活においてもさまざまな情報がさまざまな形態で流通している。我々はこれらの情報を自分なりに活用し生活している。

近年、より速い情報流通形態として注目されているコンピュータ・ネットワークでは、ネットワークにつながったコンピュータを使って誰もが情報を発信したり、ネットワークに流通する情報を活用したりすることができる。元来、「そろばん」であったコンピュータが計算のみならず、情報を検索、生産、加工、発信といった「読み」「書き」の道具としても使われている。ここで、「情報の発信」とは、自分の考えや情報を「受け手」へいかにわかりやすく伝えるかということである。

本講義では、コンピュータの概要を理解し、「電子文具」であるコンピュータを用いて、情報を効率よく処理し活用する方法や、受け手に情報を伝えるための表現方法を勉強する。

［講義計画］

入門コンピュータ ―――― コンピュータの概要と操作方法
コミュニケーション ―――― 電子メール
文書表現 ―――― ワープロ機能による文書作成と表現
データ処理 ―――― 表計算によるデータ分析と表現
情報検索と情報の再利用 ―― インターネット
情報加工と表現 ―――― マルチメディア文書の作成

以上のテーマについて数時間ずつの講義・実習を行う。

［成績評価の方法］

講義時の課題、レポート、出席により評価する。
講義内容が広範囲におよぶため、学生諸君の自主性も評価したい。

［参考文献］

桃山学院大学計算機センター（編）
『桃山学院大学計算機センターユーザーズガイド』

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論B	０９ １０	前　期 前　期	２単位 ２単位	寺　川　佳代子

[講義概要・学習目標]

コンピュータ利用の初心者を対象に入門的講義を行い、アプリケーションソフトウェア（ワープロソフト、表計算ソフト、他）の習得と円滑なキーボード操作（ブラインドタッチ）の習得を学習目標とする。
なお、課題提出の他に、講義中にも数回テストをする予定なので、欠席はしないように

[講義計画]

・キーボード操作
・ワープロソフト
・表計算ソフト
・学内メール
・図書館書籍検索システム
・ＯＳ（オペレーティングシステム）の基本操作

[成績評価の方法]

出席率
課題提出
実技テスト

[教科書]

「超図解 一太郎基本編」（エクスメディア）
「超図解 Excel 97」（エクスメディア）

[参考文献]

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論B	１１ １２	前　期 前　期	２単位 ２単位	西岡　茂樹

[講義概要・学習目標]

近年、パーソナル・コンピュータ（以下、ＰＣ）は劇的な速度で進歩を続けている。それは、かつての「計算機」としてのコンピュータを遥かに越え、人間のさまざまな情報活動を支援する道具となり、さらには人間のパートナーとも言える存在にまで成長しつつある。
これらの状況に鑑み、大学生の諸君は、出来るだけ早い時期に、ＰＣを使った情報活用能力を養成し、４年間の大学生活を実りあるものにすると共に、将来、社会に出た時にも、即戦力として活躍できるよう研鑽を積まねばならない。
本講では、ＰＣの初学者を対象として、実際にＰＣを操作しながら、ＰＣの基礎、ならびに情報活用の基礎能力を修得し、さらに今後のＰＣと人間の関係に関する知見を得ることを目標とする。
なお、講義は、ＰＣの演習が中心となるため、１回でも欠席すると以降の講義が理解できなくなる。皆出席する覚悟をもって受講すること。
また、原則として、西岡講師によるプログラミング論Ａを、継続して後期に受講すること。

[講義計画]

①ＰＣの基礎
②Ｗｉｎｄｏｗｓの環境
③キーボード入力
④ファイル管理（Ｅｘｐｌｏｒｅｒ）
⑤ＰＣを使って絵を描く（Ｐａｉｎｔ）
⑥ＰＣを使って手紙を送る（ＡＬ－ｍａｉｌ）
⑦ＰＣを使って文書を作成する（Ｗｏｒｄ）
⑧ＰＣを使って表計算をする（Ｅｘｃｅｌ）
⑨ＰＣを使って発表する（ＰｏｗｅｒＰｏｉｎｔ）
⑩ＰＣを使ってインターネットのホームページを作成する
⑪ＰＣを使って外部情報（図書館蔵書など）を検索する

[成績評価の方法]

出席率、課題の提出率、試験の成績、受講態度などを総合的に評価して判定する。

[教科書]

開講時に指定する。

[参考文献]

その都度、提示する。

科　　目　　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論B	13	前　期	2単位	牧野　丹奈子

［講義概要・学習目標］

この講義では，コンピュータの基礎知識とワープロ・表計算・電子メールといったパソコンの基本的利用方法を学習する。
この講義の目標として，パソコンの基礎知識や利用技術の修得があげられるが，これらに加えて，データを自分なりに工夫してまとめることがあげられる。つまり，あたえられたデータを，さまざまなソフトを利用しながら他人にわかりやすい形に整理し，まとめあげることを練習する。出席を重視する。

［講義計画］

1．コンピュータの基礎知識（コンピュータの仕組み，機能，利用方法など）
2．ＯＳの概要
3．ワープロ（一太郎）
4．表計算（Ｅｘｃｅｌ）
5．電子メール
6．図書館蔵書検索
7．プレゼンテーション

［成績評価の方法］

出席，課題，試験の総合点に対して絶対評価を行なう

［教科書］

プリントを配布する

［参考文献］

科　　目　　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論B	14 15	前　期 後　期	2単位 2単位	三　木　大　史

［講義概要・学習目標］

コンピュータを活用するための精髄とそのバックボーンであるコンピュータサイエンスの概念を、様々なコンピュータの操作体験によって身につけることを学習目標とする。特定のアプリケーションソフトウェアの操作能力を身につけるにとどまらず、総合的なコンピュータ活用能力の獲得を目指す。

学内電子メールを授業中の様々な場面で可能な限り使用する。このことを通して、コミュニケーションのツールとしてのコンピュータおよび電子ネットワークの特質を体験的に理解し、併せて、情報化社会のマナーを涵養する。

受講にあたって、予備知識やコンピュータ操作の経験は不要であるが、受け身の受講態度ではなく、積極的・能動的な学習態度が望まれる。電子メールの利用や少人数クラス編成を生かし、教員と学生間での情報の双方向性を高め、わかりやすい授業を目指す。

［講義計画］

(1) コンピュータシステムの概要，マウスの使い方，Windowの扱い方
(2) Windows95の基本，フロッピーディスクの初期化とバックアップ，ファイルとフォルダ，タイピングの基本
(3) エディタ，日本語入力，文字の編集（カットアンドペースト・コピーアンドペースト，検索・置換）
(4) ヘルプファイル，学内電子メールの送受信，メールのヘッダ，メールへのファイル添付と展開，ネットワーク
(5) ワードプロセッサのレイアウト機能（文字・段落の書式，スタイル，段組，ヘッダー・フッター），表の作成と罫線，ビジネス文書作成方法
(6) ワードプロセッサのアウトライン機能（文書の構造化），論文スタイル文書の作成方法
(7) 表計算ソフトウェアの基本（文字・数値・式・関数の入力と書式設定，式・関数のコピーと移動，罫線）
(8) 表計算ソフトウェアによるグラフ作成，データベース機能，簡単なシミュレーション
(9) プレゼンテーションソフトウェアの利用，図形描画
(10) クリップボードを介したアプリケーションソフトウェア間のデータ交換，オブジェクトの貼り付けとリンク，ファイルとアプリケーションソフトウェアとの関連
(11) 総合課題作成

［成績評価の方法］

出席を重視し、適宜、課題の提出を求める。
試験に代えて最後に総合課題を出し、そのレポートの提出を求める。
最後のレポートに、平常の課題・出席率・受講の積極性を加味して評価する。

［教科書］

安達一寿他（著）『インターネット時代の情報処理テキスト』（樹村房）

［参考文献］

桃山学院大学計算機センター『ユーザーズガイド』
高橋三雄（著）『コンピュータ・リテラシ for Windows』（サイエンス社）

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論Ｃ	０１	通期	４単位	小池俊隆

［講義概要・学習目標］

事務処理分野でもっとも広く用いられているコンパイラ言語であるＣＯＢＯＬについて学ぶ。ＣＯＢＯＬ言語は、ＦＯＲＴＲＡＮやＢＡＳＩＣとは考え方の違ったプログラミング言語である。レコードやファイルといった概念が、他の言語にくらべて、より明確に規定されている。

この講義では、ＣＯＢＯＬの文法の基本部分を解説する。いくつかのプログラム例を通じて、ＣＯＢＯＬプログラムの様式、作成方法、考え方を学び、プログラムを解読できるようになること、プログラムを自分で作成できるようになることを目標とする。

プログラミングの学習は、実際に操作することによって理解がより深まるので、講義による説明と実習とを交えながら進めていく。このような内容であるから、毎時間出席していないと内容が理解できず、次に進めなくなるから注意すること。

［講義計画］

〈前期〉
ＣＯＢＯＬプログラミングの文法
・四則演算、入出力の方法
・画面表示の方法
・キーボードからの入力
・入力領域の考え方
・出力領域の考え方
・作業領域の考え方
ＣＯＢＯＬプログラムの実行
課題）簡単な入力のプログラム
簡単な出力のプログラム

〈後期〉
ＣＯＢＯＬプログラミングの文法
・データの転記
・データの編集
・ファイルによる入力
・ファイルへの出力
ＣＯＢＯＬプログラムの実行
課題）単純な集計プログラム
高度な集計プログラム
ファイル処理を行うプログラム

［成績評価の方法］

実習を交え、それを重視するので出席を重要視する。実施数の２／３以上の出席を単位認定の必要条件とする（満たさない場合は単位認定できない）。出席状況と、与えられた課題の提出状況、内容により成績を評価する。

［教科書］

海老沢信一・堀　恵子（共著）『パソコンで学ぶＣＯＢＯＬ構造化プログラミング』（工学図書）

［参考文献］

必要があれば指示する。

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論Ｃ	０２	通　期	４単位	竹内昭浩
	０３	通　期	４単位	

［講義概要・学習目標］

ワークステーションの標準的ＯＳ（オペレーティング・システム）であるＵＮＩＸの入門とＦＯＲＴＲＡＮおよびＣ言語とを用いて、プログラミングの基礎を学習する。

［講義計画］

（前期）
１．ＵＮＩＸ入門
２．viエディタ入門
３．ＦＯＲＴＲＡＮでの簡単なプログラム
４．if文
５．do文
６．配列

（後期）
７．ファイルの操作
８．副プログラム
９．Ｃ言語での簡単なプログラム
１０．変数と算術
１１．for文とwhile文
１２．関数

［成績評価の方法］

試験の結果に、提出してもらうレポートを加味して評価する。

［教科書］

特に指定しない。

［参考文献］

坂本　文（著）「たのしいＵＮＩＸ」（アスキー出版）
浦　昭三（著）「FORTRAN ７７入門」（培風館）
ｶｰﾆﾊﾝ・ﾘｯﾁｰ（著）「プログラミング言語Ｃ　第２版」（共立出版）

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
プログラミング論D		通　期	4単位	三　木　大　史

[講義概要・学習目標]

Windows 上でのアプリケーションプログラムを実際に作成する事によって、Windows プログラミングの特徴である、イベント駆動型（マウスを動かして、クリックしたり、ドラッグしたり、キーボードから入力があったりするたびに処理が行われるプログラムの型）のビジュアルプログラミング（ユーザーとコンピュータとのやりとりのために、画面に様々なボックスや画像のレイアウトを決めていくこと）を体得するとともに、オブジェクト指向の考え方を理解することを目的とする。併せて、プログラミングの基本とユーザーインターフェース作成の実際を学ぶことによって、コンピュータに対する本質的な理解を深める。

プログラミングの統合開発環境として Delphi を使用する。これは、もともとは教育用に開発された Pascal というプログラミング言語を採用してあってプログラミングの作法を学ぶのには最適であり、また、Windows プログラミングに対する数々の優れた特徴を持つ。

受講にあたって、前提とするプログラミングに関する知識は特に必要なく、「プログラミング論A」を受講したかどうかは問わないが、「プログラミング論B」を受講していることが望ましい。受け身の受講態度ではなく、積極的・能動的な学習態度が望まれる。

[講義計画]

(1) Delphi の統合開発環境の概要
　フォーム，ユニット，プロジェクト，コードエディター，コンポーネント
　オブジェクトとプロパティ，イベントとイベントハンドラー
(2) 加算減算をするアプリケーションソフトウエアの作成
(3) 簡単な集計表のアプリケーションソフトウェアの作成
(4) プログラミングの基本（変数，変数の型，if 文，case 文，for 文，repeat 文，while 文）
(5) ビットマップファイル（画像ファイル）を表示させるアプリケーションソフトウェアの作成
(6) フォント（書体）の見本を表示するアプリケーションソフトウェアの作成
(7) 体重と身長を入力して肥満度を判定するアプリケーションソフトウェアの作成
(8) 簡単なエディター（テキストファイルを開き、または新規作成して編集でき、そのファイルを名前を付けて保存、または上書き保存できる）の作成
(9) 総合課題作成

[成績評価の方法]

出席を重視し、適宜、課題の提出を求める。
試験に代えて最後に総合課題を出し、そのレポートの提出を求める。
最後のレポートに、平常の課題・出席率・受講の積極性を加味して評価する。

[教科書]

藤本壱（著）『Delphi でつくる Windows プログラム』（サイエンス社）

[参考文献]

村上宣寛（著）『やさしい Delphi』（日刊工業新聞社）
ダンテマン他（著）『Delphi プログラミング大全』（翔泳社）
オシア他（著）『Delphi プログラミング入門』（プレンティスホール）

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
システム設計		通　期	4単位	牧野　丹奈子

[講義概要・学習目標]

企業を情報システムとしてみたとき，経営における情報入力，情報伝達，情報蓄積，情報分析，情報出力のありかたを考えデザインすることが，広義のシステム設計である。この中で本講義では，経営情報システムの中心的役割を果たしているコンピュータシステムに焦点をあてながら，システム設計を勉強していくものとする。

コンピュータシステムだけに着目したシステム設計は成功しない。コンピュータシステムと人間との関係や，人間同士の情報のやりとりのあり方などを考慮しなければ，企業経営にとって役に立つ情報システムを設計することはできないからである。

この講義では，経営や組織の基礎知識をふまえながら，システム設計に役立つシステム論やコンピュータシステムの設計について勉強する。

なお，コンピュータシステムのモデリング手法やシステム思考は，日常生活においても多くの場面で役立つことであろう。

[講義計画]

＜前期＞（システム設計の基礎知識）
1．システムの基礎知識
2．情報システムの基礎知識
3．経営情報システムの基礎知識
4．情報化・コンピュータシステム・組織

＜後期＞（開発過程とモデリング手法）
1．システムライフサイクル
2．ＤＦＤ
3．ＤＤ
4．ＣＦＤ
5．ＳＴＤ
6．ＥＲＤ
7．今後の経営情報システム設計

[成績評価の方法]

試験とレポートの総合評価によっておこなう。

[教科書]

プリントを配布する

[参考文献]

前期は多岐にわたるので，プリントで各章ごとの参考文献を紹介する。

後期は以下のとおり。
酒井博敬（著）「経営情報管理の技法」（オーム社，1987年）
堀内一（著）「データ中心設計」（オーム社，1988年）
河村一樹（著）「ソフトウェア工学入門」（啓学出版，1987年）
有沢誠（著）「ソフトウェア工学」（岩波書店，1988年）
「第二種共通テキスト」シリーズ （（財）日本情報処理開発協会，1994年 ）

科　　目　　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
データベース論（旧経営情報学特講－データベース論）		通　期	4単位	佐々木　宏

［講義概要・学習目標］

本講座では、リレーショナル・データベースの基礎から応用までをじっくりと学習する。ソフトウェアはAccessを用いる。最終目標は、リレーショナル・データベースを理解し、画面・帳表の設計と簡単な応用プログラム（マクロ・ＶＢＡ）の作成ができるようになることである。
実習が中心となるが、それを補完するために次の講義を行う。
①リレーショナル・データベースの概念と操作
②データベースの設計
③ＤＯＡ（データ・オリエンテッド・アプローチ）の方法
④企業の活用事例
受講に際しては、以下を注意のこと。
①２年前までのプログラミング論Ｄ（佐々木担当）とほぼ同一内容なので、その受講者は受講できない。
②パソコン実習室を常時利用するため、３５人限定である。プログラミング論と同様に、事前申し込みが必要である。申し込みが許可されないと受講できない。
③少なくとも、プログラミング論Ｂを履修済みであることが望ましい。

［講義計画］
【前期】
①リレーショナル・データベースの概要
②リレーショナル・データベースの操作とＳＱＬ
③リレーショナル・データベースの設計
【後期】
④ＤＯＡアプローチとＣＡＳＥツール実習
⑤アプリケーション作成

［成績評価の方法］

レポート２回。出席状況。

［参考文献］

適宜紹介する。

［教科書］

小川晃夫訳『ＡＣＣＥＳＳ９７オフィシャルコースウェア』アスキー出版

科　　目　　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
経営工学		通　期	4 単位	明　石　吉　三

［講義概要・学習目標］

経営工学とは経営問題に対する科学的、数学的アプローチをいう。オペレーションリサーチという名称で米国、英国で生まれ、経営学部、ビジネススクール、日本では工学部にこの名称の学科が設置されている。
本分野は極めて広く、特に数学的取り組みが多く研究されている。本講義では文科系学生諸君を前提に、経営工学（ＯＲ）アプローチの意義、手法、対象のモデル化法について講義する。なお、高度な数学的知識は必要としない。具体的講義内容は以下の通りである。
（１）経営工学とは
（２）数理計画法
ａ.線形計画法　ｂ.ＰＥＲＴ手法　ｃ.非線形計画法　ｄ.意思決定論
ｅ.待ち行列論

［講義計画］

前期　（１）及び（２）の前半
後期　（２）の後半

［成績評価の方法］

レポート及び試験による総合評価

［参考文献］

別途指示する。

［教科書］

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
オペレーションズ・リサーチ		通期	4単位	太　田　雅　晴

［講義概要・学習目標］

辞典によれば、オペレーションズ・リサーチとは、『システム運用上の問題に、数学的・科学的方法を適用し、最適の選択を発見する技法。経営、軍事での意思決定や、作戦計画などに利用』とあり、ＯＲと略して呼称される。軍というぶっそうな言葉がこの説明の中にはあるが、要はいろいろな仕事をする上で、費用においてもスピードにおいても最適なやり方を、科学的に明らかにしようとするのがこの科目を勉強する意味である。近年では、発見された最適な方法をコンピュータプログラムにして利用することで我々の生活を豊かにしてくれている。例えば、車に搭載されたナビゲーションシステムで最短のルートをドライバーに示してくれたり、最も利益が上がるようにコンピュータが自動的に株の売買をしてくれたり、コンビニエンスストアーでお客さんが満足がいくようにまた店舗の運営費用が安くなるように商品の発注を自動的に行ってくれたりするのはその例である。本講では、事例を用いながらＯＲの基礎的理論を勉強する。特に、情報処理関連試験を受けようとする人達にとっては重要な科目であるとともに、将来、プランニングに関わろうとする人達にとっても学習することで得た知見は役に立つであろう事を保証する。

［講義計画］

左記学習内容の講義を行うが、具体的には下記の課題について事例を踏まえながら講義を進める予定である。

1．最適な量を計画する。
　・最適な生産量を計画する
　・最も売上が上がるようにマーケティング予算を媒体に割り振る
　・品切れがおこらずかつ店舗運営費用が安いように商品の在庫を計画する

2．最適な組み合わせを発見する。
　・最も速くいくルートの発見
　・最も適切な人員の配置計画の発見
　・最も利益の上がる生産・販売すべき製品種の発見

3．最適計画って簡単に見つかるんですか。
　・シミュレーションの役割
　・人工知能技術の役割

［成績評価の方法］

講義中に行う課題と期末試験で総合的に評価する。

［参考文献］

必要に応じて講義中に指示する。

［教科書］

無し

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
管理会計論		通　期	4単位	清　水　信　匡

［講義概要］　管理会計論

企業は様々な経営管理の手段を有しているが、その一つの手段として管理会計がある。管理会計は、①経営管理者がうまく意思決定をするためにはいかに会計情報を利用したらよいのかという問題を課題とする意思決定会計と、②組織構成員を組織目標と整合的に行動させるために会計情報をいかに利用するのかという問題を課題とする業績管理会計にわけることができる。本講ではまずこれら両領域全般にわたって概説し、さらに管理会計の最新のテーマについて解説する。

［学習目標］

①経営における会計情報システムの役立ちの理解

②計画のための会計情報システムの理解

③組織を目標に向けて動かすための会計情報システムの理解

［講義計画］

前期

1　経営組織と会計

2　標準原価による統制、短期利益計画、長期利益計画

後期

1　予算、事業部制会計、設備投資決定、

2　管理会計の新展開
　原価企画、ＡＢＣ

［成績評価の方法］

試験の成績で基本的に評価する。

［参考文献］

［教科書］

溝口一雄編著『管理会計の基礎』中央経済社1987年

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担　当　者
情　報　会　計　論		通　期	4単位	坂　上　学

［講義概要・学習目標］
1960年代に商用の汎用コンピュータ・システムが登場して以来、会計と情報システムは密接な関係を持ちつづけてきた。企業の経営活動によって生じた事象を認識し、測定し、伝達するという会計のプロセス全体において、情報システムが重要な役割を果たしている。本講義では、会計情報システムの役割・形態とその開発手法など、会計情報システム全体にわたる問題について基本的な知識を獲得することを目的としている。

［講義計画］
以下のような内容について講義をおこなう。なお前期・後期にわたりミニテストを数回実施する予定である。

1．会計情報システムの全体像
2．会計学・会計実務と会計情報システム
3．会計情報システムと経営情報システム
4．会計情報システムの前提：情報技術の発展と情報社会
5．企業の戦略・組織と会計情報システム
6．ビジネス・サイクルと会計情報
7．財務会計情報システム
8．管理会計情報システム
9．会計情報システムのコストとベネフィット
10．会計情報論の展開
11．行動会計論の展開
12．統合会計情報システム

［成績評価の方法］
以下の配分で評価をおこなう。
・ミニテスト　４０％
・レポート（もしくは試験）　６０％

［教科書］
4月に指定する。

［参考文献］
必要に応じて適宜紹介する。

《インテグレーション科目》

科　目　名	クラス	講義区分	単位数	担当チーフ
経営情報学特講 （マルチメディア経営）		9月集中	2単位	牧野　丹奈子

［講義概要・学習目標］

近年，電気通信技術の発展は目覚ましく，コンピュータと通信が融合したインターネットに代表されるマルチメディア社会が加速度的に進展しつつある。
この講義では，日本電信電話株式会社の関西支社副支社長横井省吾氏，古谷修一ＳＩサポート部長，玉村知史地域開発推進部担当部長，という大変に恵まれた講師陣によって，マルチメディアや通信ネットワーク等について，文科系学生対象にわかりやすく論じてもらう。
また，マルチメディアを実感するために，施設見学もおこなう。，

［講義計画］

1．オリエンテーション
2．通信ネットワークの基礎（制度，サービス，マルチメディアの具体例など）
3．電気通信の基礎
4．施設見学

などを中心に、９月に集中して１５コマ実施する予定である。

最後の講義で，テストをおこなう。

［成績評価の方法］

出席を重視し，レポート，テストなどを総合的に評価する。

［教科書］

未定

［参考文献］

講義中に適時指定する。

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
簿記Ⅱ		通期	4単位	近藤健司

[講義概要・学習目標]

(講義概要)　簿記Ⅱでは、簿記Ⅰの履修を終えた学生に対し、中級程度の工業簿記と商業簿記の講義を行う。
工業簿記においては、製造業の簿記を学習し、材料費・労務費・経費、製造間接費の配賦、部門別計算、個別原価計算、総合原価計算等を取り扱う。商業簿記においては、勘定科目と仕訳、株式会社会計、本支店会計、決算整理・財務諸表の作成等を学ぶ。簿記の学習には、計算方法や簿記的な考え方に慣れることが必要であるため、計算練習を重視する。積み重ねの科目であるので、極力休まないよう努力してほしい。
(学習目標)①　日本商工会議所簿記検定試験2級程度の工業簿記・商業簿記の計算能力を身につける。②財務諸表論、原価計算の学習のための、基礎知識を学習する。③　公認会計士、税理士等の資格試験受験の出発点として必要な簿記能力を修得する。

[講義計画]

【講義計画】
〈前期〉工業簿記
① 工業簿記の構造
② 材料費・労務費・経費
③ 製造間接費・部門費
④ 個別原価計算
⑤ 総合原価計算
⑥ 標準原価計算
⑦ 直接原価計算

〈後期〉商業簿記
⑧ 現金預金・有価証券・手形・固定資産
⑨ 特殊商品売買取引
⑩ 株式会社会計
⑪ 本支店会計
⑫ 帳簿（仕訳帳の分割、伝票式会計）
⑬ 決算整理・財務諸表の作成

[成績評価の方法]

期末期各1回の筆記試験の成績に、課題の提出、出席状況を加味して、総合的に評価する。なお、本年度中に日本商工会議所簿記検定試験2級に合格した者には、別途加点評価する。

[参考文献]

中田信正・徐 龍達・堀 友章・金 在紋（共著）『現代簿記論』（中央経済社）
岡本 清（監修）『日商簿記検定新ワーク・ブック2級 工業簿記』（税務経理協会）
染谷恭次郎（監修）『日商簿記検定新ワーク・ブック2級 商業簿記』（税務経理協会）

[教科書]

番場嘉一郎・岡本 清（編著）『検定簿記講義2級工業簿記』（中央経済社）
井上達也・染谷恭次郎（編著）『検定簿記講義2級商業簿記』（中央経済社）

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
原価計算論		通期	4単位	山本浩二

[講義概要・学習目標]

原価計算の目的には、財務諸表の作成のために必要な原価数値を計算する財務会計目的と、内部の経営管理者がさまざまな経営活動を行うために必要な原価数値を計算する管理会計目的があります。製造業を営む企業が、財務諸表すなわち、損益計算書や貸借対照表を作成して利益を計算するためには、製品や原材料などの原価を計算しなければなりません。また、予算編成のためや、自社の原価構造を知って他社との競争戦略を樹立するためや、製品や部品を外注するか内製するかの意思決定、製品の収益性判断、部門の業績評価、製造工程の効率化、新製品の開発の成功のためにも原価計算が必要となります。原価計算による情報は、企業にとって非常に重要なもので、経理部門だけでなく、企業のあらゆる部門で利用されます。
本講義では、財務会計制度として行われる製品原価計算のさまざまな方法を中心に説明します。原価計算は、公認会計士試験や日商簿記検定試験などの試験科目であり、本講義でもこれら資格試験の受験に役立つレベルの内容を学習することを目標にして、練習問題を行いたいと思います。必要に応じて、工業簿記の説明もしますが、簿記的な説明よりも原価計算の実質的な理解を重視します。

[講義計画]

前期は、原価計算の基礎として、いろいろな原価概念と原価計算の基本手続きを学習したあとで、製品別原価計算の方法のうち、見込み生産の企業に適用される総合原価計算のいくつかの種類を学習します。
Ⅰ　単純総合原価計算と期末仕掛品の評価
　　平均法、先入先出法、後入先出法
Ⅱ　組別総合原価計算
Ⅲ　工程別総合原価計算
Ⅳ　等級別原価計算と連産品
後期は、受注生産の企業に適用される個別原価計算を学習し、製造間接費の配賦に関して活動基準原価計算を取り上げ、また原価管理に役立つとされる標準原価計算、利益管理に役立つとされる直接原価計算について学習します。
Ⅴ　個別原価計算と製造間接費の部門別計算
Ⅵ　活動基準原価計算
Ⅶ　標準原価計算
Ⅷ　直接原価計算

[成績評価の方法]

学年末試験および前期末に実施する中間試験をもとに評価します。

[参考文献]

小林哲夫『現代原価計算論－戦略的コストマネジメントへのアプローチ』中央経済社

岡本　清『原価計算』国元書房

[教科書]

小林啓孝『現代原価計算講義』中央経済社

加登豊・山本浩二『原価計算の知識』日経文庫